

第5章

反転する世界

01 反ユートピア

人類にとって、ユートピアは長きにわたる夢であった。シュナーベルやヴェーランドのように、それが人間の倫理的高潔さにもとづく誠実でおだやかな共同体への夢であれ、ヴェラスやメルシエのように、啓蒙的知性の進歩にもとづく理想的な社会制度への夢であれ、いや、そのような近代的意識が生まれてくるはるか以前から、人びとは〈いま・ここ〉には存在しない、しかしどこか別のところに（あるいは別の時代に）存在する（した）かもしれない楽園への夢を語りつづけてきた。そうした楽園への夢が、古代ギリシアの〈黄金時代〉伝説以来、数千年にわたって連綿と語りつがれてきたのは、それが〈いま・ここ〉にはけっして実現することのない、見果てぬ夢だったからであろう。ところが、二十世紀になると、この長いユートピアの歴史に断絶といってもいいほどの変化がおこる。一九三二年に刊行されたオルダス・ハックスリー（一八九四―一九六三）の小説、『すばらしい新世界』をひもといてみよう。すると、その扉には、

次のようなベルジャーエフ（一八七四―一九四八）の言葉が掲げられている。

ユートピアはかつて人が思ったよりもはるかに実現可能であるように思われる。そしてわれわれは、全く別な意味でわれわれを不安にさせる一つの問題の前に実際に立っている――「ユートピアの窮極的な実現をいかにして避くべきか？」……ユートピアは実現可能である。生活はユートピアにむかつて進んでいる。そしておそらく、知識人や教養ある階級がユートピアを避け、より完全ではないがより自由な、非ユートピア的社会へ還るためのさまざまの手段を夢想する、そういう新しい世紀が始るのである。〔一〕

ユートピアは実現不可能なものではなく、じつさいにその実現への道をすでに歩んでいる、とベルジャーエフは言う。いま必要なのは、だからユートピアの実現をめざすことではなく、たとえ不完全であっても、より自由な「非ユートピア的社会」へ還ることなのだ、と。ベルジャーエフのこの言葉は、ユートピアの実現にむけて進んでいる、と彼が考えた時代の不安を語りながら、しかし逆説的にも、二十世紀におけるユートピア消滅の実態を浮き彫りにする。語の起原にさかのぼって、トマス・モアの「ユートピア」が「どこにもない場所」(non-topos) / 「よい場所」(sodolite) というふたつの場所概念を含意していたことを思いおこせば、その出現を避けねばならない実現可能なユートピアとは、語の定義に等しい二つの場所を抹消し、それによってユートピア概念の存立自体を空無化する異様な立言だといわねばならない。

もっとも、「どこにもない場所」としてのユートピアの消滅にかんしては、これを二十世紀特有の現象と見なすことはできない。今日のわたしたちの目に、モアの『ユートピア』（一五二六）がいかに「悟性と空想

と機知の、才気あふれる戯れ」^②の産物に見えようとも、またモア以降、架空の世界を創出する文学的想像力によっておびただしい数の島ユートピアが虚構され、さらには十八世紀の惑星ユートピア、そしてメルシエの未来ユートピアと、のちのSFにまでつらなるユートピア文学の系譜が、しだいに非在の時空を拡大しつつ形づくられることになるとしても、現実の彼方に理想社会を構想するユートピアの夢に、それぞれの時代のそれぞれの現実が、批判の対象としていわば倒立した鏡像のようにはらまれていたとすれば、この鏡像を介してユートピアは、純粋な非在とは言いきれない錯綜した緊張関係を、現実とのあいだに結んできたはずである。

たとえば、そもそもモアの『ユートピア』は架空の理想国物語として読まれたであろうか。ヴェラスの『セヴァランブ物語』との関連で第三章第三節でも述べたように^③、この書は、いわゆる「地理上の発見」に沸きたつ大航海時代のただなかで書かれた。ユートピア島の訪問者ラファエル・ヒスロデイを、アメリカ・ヴェスプッチ（一四五二—一五二二）と航海をともにした船乗りとして紹介する著者の手法は、この時代状況のなかで成功し、この書はどうやら、架空旅行記としてではなく、アメリカ・ヴェスプッチ自身の航海記と同様、むしろ真実の旅行記として読まれたようなのだ。ヴェスプッチによる『アメリカの四回の航海の書簡』がフィレンツェで刊行されたのが一五〇五年ないし六年。一五〇七年にはそのラテン語版が発行され、その結果ヨーロッパ中の知識人社会でアメリカの航海記がひろく知られていたとすれば、いわばその続編として発表されたモアの『ユートピア』（一五二六）が、当時の読者によって、「実在の理想国の実状を物語ることによって現実の社会批判が行われている」と受けとられた可能性の方がずっと大きいとしても^④、それほど不思議ではないだろう。

それだけではない。増田義郎によれば、そのような読者のひとりであったスペインの人文主義者バスコ・

デ・キログは、一五三〇年に聴^{オイドレル}訴官としてメキシコに派遣された際、コルテス（二四八五—一五四八）以下の植民者による圧制からインディオを救済するためにサンタ・フェなる新しい村を建設し、そこに『ユートピア』第二部に準拠した共同体を実現したという^⑤。この驚くべき事実は、モアの紡ぎだした架空の夢が、その現実批判のまなざしのうちに現実変革への意志に通じる回路を内包していたことを告げているが、十六世紀の人文主義的土壌にすでにして懐胎したこの変革への意志こそは、ユートピアを文学的虚構から社会理論へ、さらには社会的実践へとシフトする力であり、キログのサンタ・フェがその風化とともに歴史の闇のなかに埋もれていった後もなお、ユートピア社会主義者が登場する十九世紀前半まで、ユートピアを非在の場から解き放つ力として命脈を保つのである。

この地上に理想社会の建設をくだてるユートピア社会主義者の試みは、しかし、たとえばフーリエ（一七七一—一八五八）の「ニュー・ハーモニー」の場合も、数年の実験の後、いずれも現実的社会基盤の脆弱さのゆえに内部崩壊していき、その結果「どこにもない場所」としてのユートピアの、だれの目にもあきらかな消滅は、十九世紀も末、かれらの社会理論を「純然たる幻想」^⑥と断定し、唯物史観と剰余価値説に立脚する科学的社会主義への転換を宣言したエンゲルスの公式「ユートピアから科学へ」（von der Utopie zur Wissenschaft）を待たねばならなかった。ここでエンゲルスが否定的にいう「ユートピア」があくまで「幻想」、すなわち非現実性を意味していること、「科学」となったマルクス主義によつて歴史の終局に思いつがれた「自由の国」が「それ自身きわめつけのユートピア」^⑦であることについて、説明をくわえる必要はないだろう。社会主義の歴史的必然を説くマルクス主義理論の普及とともに、もはや幻想ではない実現可能なユートピアが、現実の歴史過程に組みこまれた白昼の未来に、その姿をあらわしたのである。

一九一七年のロシア十月革命は、こうして理論上「どこにもない場所」であることをやめたユートピアの、実現への第一歩をしるす画期的事件であったが、それは同時にユートピアのもうひとつの指標である「よい場所」が消滅する分水嶺でもあった。冒頭で引用したベルジャーエフのユートピア告発は、ソヴィエト・ロシアの出現という歴史的現実の成立を待つてはじめて、リアリティーある存立基盤を獲得するのであり、スウィフト（一六六七―一七四五）以来、ユートピア文学の異端でしかなかった反ユートピア文学が涌出するの、一九一九年から二五年にかけてのソヴィエト・ロシアにおいてである。N・D・ヴェレクによれば、かれら反ユートピア作家たちは、社会主義の未来に熱狂するマヤコフスキー（一八九三―一九三〇）らを横目に見ながら、より醒めた眼で時代の現実を見つめ、ユートピア文学の枠組みを用いて「人間はユートピアでは生きられないし、生きてもならない」という診断を下したという⁸⁾。

現実のただなかに出現したユートピア国家ソヴィエト・ロシアを前にして、現実批判を旨とするユートピア的想像力が、その批判のまなざしをユートピア自身へスライドさせたとしても不思議ではないだろう。だが、右の診断が二十世紀反ユートピア文学の基本テーゼとして、ハックスリーの『すばらしい新世界』（一九三二）、オーウェルの『一九八四年』（一九四九）へと受け継がれていく過程で、ユートピア批判はしだいに政治レヴェルの全体主義批判へとからめとられていき、現実をデフォルメしたものでしかない反ユートピア像のなかに、ユートピアの、変革への意志を封じこめてしまうのである。成立したばかりのソヴィエト・ロシアの内部にあつて、実現されたユートピア社会に精神の危機を看取した者のひとりであるザミャーチン（一八八四―一九三七）の場合――彼の『われら』は、『すばらしい新世界』『一九八四年』とならぶ、二十世紀前半の代表的反ユートピア小説と見なされることが多いのではあるが――、だが、事情はいささか異なつていた。

02 「反エントロピー——ザミャーチン『われら』」

一九二〇／二一年に書かれたザミャーチンの『われら』が、政治的諷刺小説の側面を色濃くもっていることは否定できない。それはこの作品が国内発禁処分を受け、一九二四年の英語版をはじめとする国外での刊行を強いられたという出版の経緯にも反映しているが、にもかかわらず、諷刺の精神が虚構するその戯画的世界は、おなじく諷刺的といわれる『すばらしい新世界』や『一九八四年』の、嘲笑と悪罵を基調とする世界ほど黒く不快なイメージに終始してはいない。ひとつには、この「自然科学的かつ集団主義的ユートピアを諷刺的にえがいた最初の小説」^①が、きわめて巧妙に伝統的ユートピア文学の枠組みを利用しているためであろう。

『われら』の舞台「単一国」は、ハイテクノロジーの粋をつくした未来国家であり、直線と立方体によって機能主義的に構成された都市空間は、ガラス建築の透明なイメージに光りかがやいている。建物も舗道もすべてガラスからなるこの国で、石油食品を合成し、自家用飛行機に乗って空を翔る住人たちの生活は、その起源をフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』(一六二七)にまで溯りうる科学技術ユートピアのひとつの帰結をしめしていようし、また、テラー・システムと「時間律令板」によって労働と日常生活を——さらには性の「クーポン券」によって性生活までも——秒きざみで管理され、最高指導者「慈愛の人」と公安警察「守護局」によって調和と秩序を保たれている社会にしても、モア以降、ユートピアがいつかんで追求してきた合理的管理システムによる画一化された秩序の制度から、大きく逸脱したものはな

いだろう。もちろん、ユートピアの理想的な形姿をまとった出来が、まさにそれゆえに反ユートピアへの反転を招来する点に、今世紀のユートピア文学における最大の逆説はあるのだが、『われら』の場合、無機質のガラスが呼びおこす一種抒情的なイメージの表出もあつて、管理社会の反ユートピアにはさほどグロテスクなものを感じられないのである。そして、なによりも、個々の「われ」の意識を「われら」なるひとつの有機体へと統合・融合した住人たちの眼にうつる単一国は、「楽園という古代の伝説」の再現なのであり、このガラスの楽園で等しく透明な存在となった人間たちは、自分たちの自由を奪う諸機構を「われわれの幸福を護ってくれるもの」として無邪気に讃えるのである。

楽園の再来だ。われわれは再びアダムとイヴのように純朴になり無邪気になった。「……」何もかもが明快だ、楽園のように、子供のように明快だ。慈愛の人、機械、立方体、ガスの鐘、守護官——これらすべては善であり、これらすべては偉大であり、美しく、高貴で、清らかで、クリスタルのように純粹だ。〔10〕

規則的かつ反復的な幾何学的構造のゆえに、古来ユートピストを熱狂させてきた「クリスタル」が、こうしてユートピアの精華をしめすイメージとして呼びだされ、「美しく透明な永遠のガラス」〔11〕のイメージと共振しつつ、その純粋な輝きのうちに単一国をつつみこむ。『われら』におけるクリスタルガラスはしかし、ユートピアの合理的秩序を表象すると同時に、またいつぼうでは、ザミヤーチンの「エントロピー」概念に通じる「生の活性エネルギーの冷却、生の流動性の凍結」〔12〕をもそのイメージ内容にふくんでおり、この負のイメージによって、ユートピアの裏面を照らしだしもするのである。

「ザミヤーチンのいう「エントロピー」とは、科学・宗教・社会生活・芸術の創造の起点に存した「炎の燃えたぎる球体」を冷却化し、ドグマ化する力であり、革命のマグマを「ドグマの殻とその上に築きあげられたこのうえなく堅固で石のように堅い造造物」へと変える「遺伝性の眠り病」である」¹⁵。この死にいたる病は、『われら』では「エネルギー」に對置され、革命組織「メフィ」の攻撃の対象となる。人類の未来について「最後の革命」¹⁶をなしとげ、万人の幸福を実現したはずの単一国にも、そのユートピアの原理である「エントロピー」に反逆し、それに代わる永久革命の原理である「エネルギー」を突きつける非合法組織がまだ存在していたのだ。メフィの一員である女I三三〇号は、『われら』の主人公D五〇三号——単一国の住人は、全員このようにアルファベートと数字からなる名前で呼ばれている——にこう語りかける。

いいこと、世界には二つの力が、エントロピーとエネルギーがあるでしょう。一つはこの上なく仕合わせな静謐を、幸福な均衡状態を目指し、もう一つは均衡状態の破壊を、果てしない苦しい運動を目指す。このエントロピーのほうを、私たちの先祖は——より正確にいうと、あなた方の先祖のキリスト教徒たちは、神として崇めていたわけね。でも私たち反キリスト者は……」¹⁵

「エントロピー」と「エネルギー」とからなるこのような二元論的世界観にもとづいて、革命組織メフィはユートピアの原理としての「エントロピー」を打破しようとするのだが、そのための手段として、メフィは、国家の一大事業である宇宙船建造にたずさわるひとりの数学者・D五〇三号に接近をはかる。というのも、この宇宙船「積分」号は、すでに地球全体を支配下においた単一国が、その「数学的に誤りのない幸福」を「いまだ自由と呼ばれる未開状態にあるかもしれない」……」他の惑星の住人たち」¹⁶に強制的に

分ちあたえるために建造されつつあるもので、メフィはこの宇宙船を乗っ取ることによって、単一国に革命を起こそうと計画しているからである。忠実な国家要員として「われら」の合理的世界に住んでいた D五〇三号は、I三三〇号によつて愛という非合理的な感情を呼びさまされ、彼女との至福の愛のさなかに「クリスタルの溶解」「立」を体験することで、クリスタルの楽園の解体をもくろむメフィの計画にこころならずも加担していく。

宇宙船乗っ取り計画は、しかし最後の段階で発覚し、その結果騒乱状態におちいつた街頭で、国家とメフィの、「エントロピー」と「エネルギー」の闘争がくりひろげられることになるのだが、ここに定式化された「エントロピー」と「エネルギー」の相剋の構図を、ユートピアか自由か、幸福か自由か、という二者択一の図式に還元し、国家によるメフィ圧殺の物語を、ただソヴィエト権力による反革命分子の排除や自由の抑圧にたいする告発もしくは予言として（のみ）読み解くことは、それが「最後の革命」を自称するユートピアと永久革命との相剋を問う小説の主題を歪曲するものであるのはもちろんのこと、ユートピアにたいするザミヤーチンの透徹した洞察をイデオロギー批判の枠内に封じこめることになってしまうであろう。のちのスターリン体制がいかに『われら』を模倣したにせよ、またそれゆえにザミヤーチンの亡命（一九三二年）という事態を招いたとしても、『われら』における現実批判のまなざしは、一九二〇年当時のソヴィエト・ロシアの状況だけに向けられていたのではなく、実現可能となったユートピアに内在する本質的問題を ついでるように思われるからである。

『われら』の反ユートピアは、メフィによる騒乱状態を收拾する過程で国家が執行する「大手術」において、その真のすがたを露呈する。人類が到達した「最も合理的な文明」〔18〕の解体の危機に直面した国家はその危機の原因を幸福な均衡状態とは別のものを志向する「想像力」にもとめ、国民全員の想像力の剔出を

決定するのである¹⁹⁾。想像力をつかさどる脳神経節を破壊すれば、人間は「愛とか嫉妬とかいう気違い沙汰」²⁰⁾、あるいはまた「魂という病氣」²¹⁾から最終的に解放され、機械と同等の完全無欠な存在となる。そのとき地球は、「百パーセントの絶対的幸福という絶頂に到達した惑星」、すなわち「理性ある石たちが組織社会に統合されている沈黙の青い惑星」²²⁾となつて完成されるのである。『われら』の主人公は、かつて「手記6」に次のように記していた。

ここで言っておかなければならないのは、われらの間でも生活の凝固や結晶化はまだどうも完了して
いないようであり、理想までにはあと数段階が残されているという事実である。理想（それは明らか
である）はもはや何事も突発的には起こらないところにこそ存在する「……」。²³⁾

しかし、彼のいう「理想」は、それをつきつめた国家によつて、「理想はもはや何事も「……」起こらないと
ころにこそ存在する」と、書き改められるのである。

時間律令板に定められたとおりの同じようなことが起こる合理的世界から、絶対的幸福と称する何も起こ
らない沈黙の世界への失墜、透明で純粋なクリスタルから凝固と凍結のクリスタルへの変容——この失墜と
変容をもたらすのが、理想社会における「生活の凝固や結晶化」の未完了に気づいた国家の、あくまで理想
を完成させようとする強固な意志であるとすれば、わたしたちはそこに、ユートピアの反転をひきおこす核
心的契機を読みとることができらるだろう。すなわち、現実変革への意志によつて非在の場に生みだされた
ユートピアが、現実の場に移されてもおお自己の内部に刻みこまれた尖锐な理想を維持しようとするとき、
現実批判としては有効に機能しえたその理想は唯一絶対の目的としてドグマ化され、ドグマ化された理想の

完全な実現をもとめる、こう言つてよければ完成への意志のなかに変革への意志は吸収されていく、いやむしろ抑圧されていく。こうして変革への意志を喪失したユートピアは、単一の究極目的の共有を万人に強要し、理想の結晶化を阻害する異分子を排除し、ついには共同幻想におおわれた支配と隷属の体制へと凝結するのである。

ザミヤーチンはしかし、ユートピアの未来をそのような憂鬱の色に染めあげてしまうのではなかった。小説『われら』は、みずからすすんで想像力剔出手術をうけた主人公の「理性の勝利」²⁴を確信する言葉で閉じられているが、この結末をみちびく作家の強烈な諷刺の背後には、ユートピア的思惟の基底にあったはずの変革への意志の再生をもとめる強靱な精神が、逆にうかがわれるのである。

社会制度のユートピアに失われつつある変革への意志を再生し、それによつてユートピアの凝固を内部から破碎しようとするザミヤーチンの考えは、『われら』執筆後まもなく書かれたエッセイ「文学と革命とエントロピー」(一九三三)においても、「石灰化、硬化症、殻、苔、安穩との闘いの手段」としての「反エントロピー的」文学²⁵の要請のうちにくりかえし述べられている。そこにおいて「反エントロピー的」なるものをこそ「ユートピア的」と呼んだザミヤーチンの、ユートピア的思惟の再生によせる希望は、だがハツクスリーからオーウェルへとつづく反ユートピア文学の系譜のなかで葬られていく。一九三〇年代以降、左右全体主義国家の抬頭に対峙する反ユートピア文学は、ユートピア幻想を冷笑するイデオロギーとして意図的に機能し、完成したユートピアのグロテスクな未来図を呈示することによつて、へユートピアか自由かとの二者択一を迫るのである。二十世紀の文学に顕在化するユートピア像の零落とともに、ユートピア的思惟の可能性もまた、ほぼ封印されてしまったかに見える。

だが、ユートピア幻想破壊の名のもとにあらゆる超越的なものを拒み、ただ現実在即した存在たろうとす

るとき、わたしたちの生はいかなる様態をしめすであろうか。一九二〇年代の芸術・スポーツ・生活様式に兆した即物的傾向が虚偽的イデオロギーの破壊に一定の役割をはたすことを認めつつ、カール・マンハイムは、『イデオロギーとユートピア』（一九二五）において次のように言う。

しかし、われわれの世界において存在を超越するものを完全に破壊することは、人間の意志が死滅するような即物性をもたらすことになる。「……」ユートピアの消失は、人間自身が物と化す静止した即物性を出現させるのである。^{〔26〕}

マンハイムの予言するこの事態が、こうしてザミヤーチンのえがく「理性ある石たち」の世界に酷似した様相を呈し、ユートピア幻想破壊の限界もしくは両刃の剣的機能をあきらかにするとき、ユートピアをめぐる問題は、単純な二者択一を許さぬ課題となつて、ふたたびわたしたちの前に立ちあらわれてくる。

03 — 千年王国、あるいはユートピアの収束 — ムージル『特性のない男』

ムージルの『特性のない男』は、初期の草稿『スパイ』にまでさかのぼれば、ザミヤーチンの『われら』とほぼ同時期の一九一九／二〇年頃に構想された小説である。むろん、オーストリアにいたムージルをとりまく状況は、ザミヤーチンのそれとは大きく異なっていた。

単一のイデオロギーに染めあげられたロシアとは逆に、さまざまなイデオロギーが乱舞し、二度とふた

たび単一のイデオロギーが、ひとつの〈文化〉が、われわれのまっ白な社会のなかに自然発生することはないだろう」(27)と思われた一九二〇年代初頭のドイツ・オーストリアの思想的混乱は、一九一三—一四年のヴィーンを舞台にした『特性のない男』第一巻(一九三〇)にも戯画的にえがかれているが、そのような時代にあつて、「いま欠けているのは理想的であることではなく、理想的であるための前提条件なのだ」と言い、理想的であるための「社会的条件を作りだすこと」(28)の必要性をうったえたムージルの変革への意志は、その後、多様なイデオロギーがナチズムという「単一のイデオロギー」へと収束し、漆黒の反ユートピアドイツ第三帝国が現出する時代のなかでも失われることはなかった。一九三二年の第二巻前部の出版後、三三年にはベルリンからヴィーンに、三八年にはヴィーンからチューリヒにと、第三帝国からのたえざる逃走のなかで書きつがれた『特性のない男』は、四二年の作家の死によつて未完に終わるけれども、二十余年の時代的振幅をはらむこの小説において、ムージルは、ユートピア幻想の仮面を剥奪しつつ、しかしけつして冷笑的態度におちいることなく、いつかんにユートピア的思惟の可能性を追求しているのである。

第一次大戦前夜のオーストリア—ハンガリー—重帝国を舞台とする『特性のない男』は、狭義のユートピア文学に属する作品ではない。ザミヤーチンをはじめとする反ユートピア小説の作家たちが小説の枠組みとして好んで設定する未来社会は、十八世紀後半のフランスにはじめて成立して以来、十九世紀の半ば以降、ユートピア文学の主流となる未来ユートピアの系列につらなるものであるが、かれらが、この文学形式と不可分の関係にある進歩の必然性の観念を利用して、歴史の最終段階に達した社会をはじめから諷刺的に、実現可能なヴィジョンとしてえがくのは対照的に、ムージルは歴史の生成段階にある近過去の現代社会を設定し、そうすることによつてユートピア的思惟の目覚めと展開を、個人的意識のレヴェルで考察するので

ある。

その近過去の現代社会とは、生産効率をもとめて分業化をおしすすめる「蜜蜂国家」であり、また近代合理主義が行きついた果てに、事物の機能的連関が人間の体験にとつてかわつた社会である。そのような「超個人的なシステム連関」²⁹からなる社会は、小説のなかで、人間中心的世界観が解体した「男のいない特性の世界 (eine Welt von Eigenschaften ohne Mann)」³⁰あるいは「体験する人間のいない体験の世界」と呼ばれ、さらには「感情の凝固した月の風景」にも「数億キログラムの石と化した世界」にもたとえられるが、しかし、この「完全で完成した」世界に見られる反ユートピア的兆候は、いまだユートピアの凝固とおなじ位相にあるのではない。なぜなら、そのいっぽうで、このいっけん堅牢であるかに見える社会の均衡状態は、無秩序な気体の分子運動から導かれる「平均値」のようなものでしかないと言われるからである。つまり、それはただ、二十世紀になつて顕在化した大衆社会状況を反映する、無秩序のまま凝固した「おなじようなことが起こる」社会ではないのであり、そのような社会に小説の主人公ウルリヒを導きいれることによつて、ムーヅルは、現実社会のありふれた現状にゆさぶりをかけようとするのである。

ウルリヒの登場によつて、そしてたしかに、一九一三年のヴェインという「おなじようなことが起こる」社会はあらたな相貌を見せはじめた。「足下には確固たる大地があり、身体にはしつかりとした皮膚があるという、ほとんどの人間にはきわめて自然に思われる感覚が、わたしの場合にはそれほど強く発達していないのです」などと、三十二歳にもなつてぬげぬげと言つてのけるこの「可能性人間」の周辺で、さまざまな騒動が起こり、とほうもない議論がまきおこり、また、彼の可能性感覚の視線をあびて、「現実となりえたかもしれない無数の可能性」が、凝固した現実の背後でひそやかな光芒を放ちはじめた。ウルリヒにとつては、そのような「可能性」のひとつひとつが潜在的ユートピアであり、したがつて、狭義のユートピア文学が

構想する唯一の完全な社会とは根本的に異なる、ユートピアの複数性がそもそもその前提としてあったはずなのだが、本書第一章ですで見たとように、それはアガターテとの出会いとともにいつしか忘れられ、結局は〈別の状態〉あるいは〈千年王国〉という単一のユートピアへと収束していくのだった。この収束のメカニズムを、ここであらためて確認してみよう。

『特性のない男』第一巻で、ウルリヒはいくつかのユートピアの存立を「可能性」として試みる。たとえばそれは、科学的合理主義を核とする「精密な生のユートピア」であったり、あるいはまた、一種の戦略的相対主義といえる「エッセイスマスのユートピア」であったりしたわけだが、そうした試みをおおしてウルリヒは、「正しい生」のあり方を探求しようとしたのだった。このあまりにも素朴な、また夢想的な試みは、しかし当然のことながら次第に現実の波にのみこまれていく。平行運動の周辺では、ムーゼルが「パピロンの精神病院」²⁰と呼んだ思想的混乱状況が日常的に生じていた。たとえば、さまざまな人がさまざまなスローガンをこの一大愛国運動の場に持ちこむが、そのうちの半分は「……へ帰れ！」という主張であり、のこりの半分は「……に向かつて進め！」というものであった。この混乱をまえにして、「重要な思想は数多くあるが、結局のところ、もつとも重要な思想はひとつでなければならぬ」と考えるシュトゥム將軍は、そのもつとも重要な思想を見つげるために「中欧の理念のストックの総在庫調べ」を思いたち、勇敢にも国立図書館のなかに突撃するが、三五〇万冊の本をまえにして呆然と立ちつくしてしまう。

時代の思想的混乱を收拾しようとするのは、シュトゥム將軍だけではない。ウルリヒのものちに平行運動の会合の場で「精神の総在庫調べ」を開始することを提案し、それは平行運動の唯一の使命である、と断定する。ウルリヒにとって、それは彼のユートピア探求とも密接にかかわる真剣な提案だったのだが、しかし、その場に居合わせた人びとは、ラインスドルフ伯爵以外ほぼ全員が、その提案をたちの悪い冗談としか思わ

ず、現実感覚の体現者アルンハイムにいたっては、次のように言つてウルリヒを嘲笑するのだった。「われわれの友人は「……」合成ゴムや合成窒素を作るように、正しい生はある種の合成で作らせると信じているのです」(傍点筆者)。

現実の壁はかくも厚く険しい。しかも、非合理主義者によつて奏でられるいくつもの疑似ユートピア願望が、これに追いつちをかける。民族主義派青年運動が唱える「完全無私人びとの共同体」であれ、物質文明からの救済をもとめる文化保守主義者の「プラトンの魂の共同体」であれ、それらユートピア的と呼ぶる共同体願望は、ウルリヒのもとめるユートピアと似て非なるものであるだけに、彼をいつそう苛立たせるのである。思想的混乱、現実の壁、そして非合理主義の跋扈——こうした渦のなかに巻きこまれて、しだいに反現実志向を強めていくウルリヒをとらえたのが、「芸術のような生」のユートピアだった。「エッセイ・スムスのユートピア」でかいま見た「精密と非精密、厳密と情熱の結合」を完全性と美の合一にゆだねるこのユートピア構想について、ある研究者はそれを「〈別の状態〉のユートピアにいたる最後の予備段階」と見なし、そこにすでに反自然・対象喪失・抽象性など、〈別の状態〉の負の指標をなす諸契機が存在が認められると言う¹⁾。「芸術のような生」のユートピアが、「詩人の創造した人物」のように生きることが理想とするものである以上、そこに反自然や抽象性が見られるのはきわめて当然のことではある。だが、忘れてならないのは、「芸術のような生」のユートピアがまさにそうした非現実の次元にはじめから立つており、したがつて、そこにはただ「もはや上昇というもののない完全性の観念と、上昇にもとづく美の観念とがひとつになる愛の海」という茫漠としたイメージが浮遊しているだけなのをたいし、つまり、いかに尖鋭化しようともそこに実現可能な実体はなく、あくまで現実への空想的反措定にとどまるのにならう。この「別の状態」のユートピアは、アガターという同伴者をえて、実現可能な到達目標になる、ということである。「芸

術のような生」のユートピアと「別の状態」のユートピアのあいだには、実現可能性という基準から見れば、十九世紀までのユートピア像と二十世紀のユートピア像とを隔てる断絶に近い、決定的な質的転換があると言っている。だからこそ、「別の状態」のユートピアのゆくてには、茫漠とした「愛の海」のイメージに代わるくつきりとした「愛の海」が、「千年王国」という遙かなる約束の地に浮かびあがってくるのである。

この海は、クリスタルのように純粋な永遠の出来事によってみだされている不動と隔絶なのだ。かつて人びとはそのような生を、この世でいまにも実現されるものとして思いえがこうとした。それこそが千年王国なんだよ！「……」ぼくらはそのように生きよう！³²

「芸術のような生」のユートピアに幻視された「愛の海」は、こうしてクリスタルの純粋なイメージに輝く「千年王国」の海へと転位し、完全性と美の合一を兄妹愛の成就のうちにもとめる。だが、「千年王国」の「愛の海」が同時に「不動と隔絶」(eine Reglosigkeit und Abgeschlossenheit)を体現すると言われるとき、わたしたちは『われら』におけるクリスタルの変容、あの、透明で純粋なクリスタルから凝固と凍結のクリスタルへの変容を想起しないだろうか。兄妹ふたりの神秘的愛の共同体である「千年王国」は、もとより合理的社会制度である「単一国」の対極に位置するものであり、「不動と隔絶」という言葉も、ムージルはマイスター・エックハルト(二六〇頃—一三二八)の言葉から取ったものと推測することができる³³。にもかかわらず、のちに言われるように、「千年王国」においては「完全に静止していなければならない。いかなる欲求にも場所をあたえてはならない。たとえそれが質問したいという欲求であっても。」「……」知識は、そし

て意志もまた、精神から切り離されねばならない。現実と、現実に向かおうとする欲望を断念しなければならぬ。頭も心臓も四肢もただ沈黙と化すまで、じつと耐えていなければならぬ」「²⁴とされるとき、たとえそれが世界と直接ふれあうための神秘的没我の要請であるとしても、²⁵の意識の消去にまでいたるあらゆる欲求の断念によって絶対的境界に結晶する「千年王国」が、クリスタルの凝結のイメージと完全に無縁であると、はたして言いきれぬだろうか。

あらかじめ確認しておけば、「別の状態」のユートピアの前段階に位置づけられる「芸術のような生」のユートピアには、現実をくつがえすアナキーな起爆力が秘められていた。このユートピアが現実との回路を切断した非現実の次元に立つものであり、同時に、そのモデルとして選ばれた文学が、社会の規範を否定する美的モデルネの反抗精神とむすびついていたとすれば、それも当然であろう。くわえて、日常生活の意味を寸断するところに成立する文学の美には、「これまでのいかなる政治的革命よりも並はずれて非情かつ冷酷な転覆」の力がひそんでいられると言われるのであれば、そこには、あるいはザミヤーチンの「反エントロピー」に近い破壊力がこめられていると言えるかもしれない。「千年王国」をめざす兄妹愛の試みのうちにも、このアナキーな起爆力は受け継がれている。「千年王国」は兄妹愛の成就する「愛の王国」であることが、はじめからはつきりと約束されているし、兄妹愛の成就は近親相姦というもつとも反社会的な愛の形態をとることが、これもつよく示唆されているからである。

そのように、「愛のアナキズムの試み」として、さらには「世界にたいする宣戦布告」として始まったはずの兄妹愛の試みは、禁忌の醸したす濃密な気配をほらみつつ、しかしその後はずいぶん対話に時をついやし、アナキーな欲望充足を回避しつつける。それはもちろん、ひとつには、行為をもとめる前に、まずはそのためのさまざま前提をつくらねばならないというウルリヒの姿勢に由来するのではあるけれども、

そしてじじつ、ウルリヒは、ようやく実現可能なユートピアとして立ちあらわれた「別の状態」に到達すべく、神との合一を語る聖者たちの忘我の告白に「精緻な研究者」として耳をすまし、あるいは両性具有の存在を語る神話的始原世界に「計算者」として探測器をおろすのだが、そのような周到な探測の途上、第二巻第十五章において、「別の状態」のユートピアを可視的に表出する「千年王国」の形姿が兄妹の行方を照らす「愛の海」としてはるかなる約束の地に浮かびあがってきてからというもの、クリスタルの海に託された「千年王国」の約束のもとで、「千年王国」での行動規準を「ただひとつの原理」となすことによって、兄妹愛の試みはその始点に有していた破壊的な力を急速に失っていくのである。作者が生前に発表しえた第二巻第三八章にいたるまで、ウルリヒとアガーテに「愛のアーネキズム」に相当することはなにひとつ起こらず、ふたりはただひたすら「聖なる会話」を交わすだけだと言つてよい。

第二巻第四五章（校正刷稿）においてウルリヒがようやく行動を起こし、夜会服に着替えるため絹の靴下を穿いているアガーテを背後から抱きしめたときにも、その「肉の身振り」はそれ以上の進展を拒まれる。そのときふたりが「言葉では説明しがたい警告」を感じとつたからであるが、だがそれは、近親相姦を禁じる「道徳の掟」とはなんの関係もなかった。そうではなく、

ふたりが以前、あたかも熱狂的な比喩のなかでのようにその一部を享受したことのある、より完全な合一の世界から、より高い命令がふたりに下されたようだった。まだ影のようなものでしかないが、より完全な合一の世界から、より高い予感、期待、あるいは将来への配慮が、ふたりに向かつて吹きよせてくるようであった。「35」（傍点筆者）

さらにその後、知人たちの招待をすべてことわり、自宅にひきこもった兄妹の様子は、次のように述べられている。

だが、あれ以来、いささかも弱まることなく感じつづけてきた情熱、あのとき禁令によつてではなく、約束によつて砕けてしまったあの名指しがたい情熱は、性交の重苦しい中断にも似た状態にふたりを置いてもいたのだった。^{〔36〕}（傍点筆者）

ふたりの肉体を隔てているのが近親姦タブーではなく、「まだ影のようなものでしかないが、より完全な合一の世界」から下された命令、すなわち「千年王国」の「約束」であることは、右の二つの引用からも明らかであろう。現実の秩序を根底からくつがえすはずの兄妹愛の試みがこうして「千年王国」の約束へと吸収されていくとすれば、社会制度のユートピアに認められた反転の機制、完成への意志が変革への意志を抑圧するというあの機制は、個人的意識の内部におけるユートピアにも同じように組みこまれているのであろうか。

この懸念は、「千年王国」が顕現する「ある夏の日の息吹」の庭で、現実のものとなる。ムージルの絶筆となった第二巻第五章（清書稿）において、ウルリヒとアガータは、愛をめぐる果てしのない会話がとだえた刹那、自宅の庭で次のような情景のなかにつつまこまれるのである。

色あせた花びらの雪が花期のすぎた樹々をはなれ、音のない流れとなって光のなかをただよっていた。それをほこぶ息吹はあまりにもやわらかく、ひとひらの花びらもゆれてはいなかった。芝生の緑に

その影がおちることもなかったが、しかし、その緑はまるで眼のように、内側から濃い翳りの色を滲ませているように見えた。やさしくあふれるほどの初夏の葉におおわれた樹々や灌木は、あるいはかたわらに佇み、あるいは背景にしりぞいていたが、それはさながら、祭りの衣装に身をつつみ、驚嘆しつつ魅了されて、この葬列、この自然の祝祭をほうぜんとながめている観客のようであった。春と秋、自然の言葉と自然の沈黙、あるいはまた生の魅惑と死の魅惑が、この絵のなかで溶けあわされていた。心臓は止まり、胸からえぐりとられ、空中を進みゆく沈黙の葬列にくわるかのように思われた。^{〔37〕}

透明な光をあびて音もなく花びらの舞うこの庭で、すべてのものはあまねく清澄な光にみだされているように見える。静謐な恍惚をたたえる花びらの漂いは「自然の祝祭」となつて純粹な生起を開示し、兄妹ふたりは季節の差異、生と死の境界の消えうせた神秘の空間につつまれるかのように見える。聖なる世界への変容をとげたこの庭の描写を、かつて川村二郎は「二十世紀ドイツ語散文のいかなる成果も及びえないような、セレニテ」^{〔38〕}と呼んだが、そのいつけん聖化された空間で、しかし「芝生の緑」が、あたかも抑圧したものの影が浸出するかのごとく、眼の直喩をともなつてその内部から濃い翳りの色を滲ませていくのはなぜか。また、あらゆる動的な要素を排除した静寂の極限において、「自然の祝祭」もまた「沈黙の葬列」へと転位するのはなぜか。さらに言えば、待ちのぞんでいた「白昼の神秘主義」がついに成立したいま、かねてよりウルリヒから聞かされていた「千年王国」での身の処し方を実践しようとしたアガターが、「だがすぐに、思考・感覚・意志の語りかけを完全に停止するのは、子どもどころ、告解と聖体拝領のあいだに罪を犯してはならないとされたのと同じくらい、不可能な課題だとわかった」という理由で、いとも簡単にその没我の

要請に背をむけてしまうのはなぜなのか。

その謎を解くヒントは、右に引用した、「ある夏の日の息吹」の庭を描写する文章中に見いだすことができる。そこに「春と秋、自然の言葉と自然の沈黙、あるいはまた生の魅惑と死の魅惑が、この絵のなかで溶けあわされていた」（傍点筆者）としるされているように、ムージルはこの聖なる庭を「絵」(Bild)としてとらえているのである。〈Bild〉というドイツ語が多義的であいまいだというなら、J・キューネのように、この庭は「一枚の絵画」(ein Gemälde)〔6〕として見ることができると言ってもいいだろう。あるいは、さらに一歩おしすすめて、一枚の「静物画」として見ることができると言ってもいい。そして、「ある夏の日の息吹」の章の直前におかれた、おなじく清書稿である第二巻第五章では、まさにその静物画をめぐる会話が兄妹のあいだで交わされているのである。

「静物画」(Stillleben)とは、文字どおりにとれば「静止した生」ないし「もの言わぬ生」を意味するものであるが、実際に描かれた静物には、それが動物であれ、植物であれ、描かれた事物とは異なるものが表出されている、とウルリヒが言う。題材として選ばれた事物は、それらが芸術の圏内に呪縛されることよって、「描かれた生のもつ不可思議な魔力」を獲得するのだ、と。このウルリヒの言葉をアガターテはすぐに理解し、それは海辺にたたずんで沈黙した海を見つめているときに感じることをおなじだと思う。海辺に立っていると、昆虫の羽音が聞こえてきたり、そよ風が草原のいろいろな匂いを運んでくるのがわかったりするが、そうした生きた自然がもっている意味は、「なにも語りかけてこない荒涼とした海」を見つめているうちに失われてしまう。静物画を見ているときに感じるのも、そのような、見る者に「この幸福な、飽くことをしらぬ哀しみ」をかきたてる力なのだ。静物画に描かれた事物を見つめていると、しだいにそれらが「生の多彩な岸辺」にたたずんでいるように見えてくるが、しかしその、いままさに生きた自然に回帰するかに見える

静物の「眼はおぞましさに満ち、舌は痺れて」いるのである。

自然の生から離脱して「静止した生」の圏内に取りこまれた静物がしめすこの不気味な姿が、兄妹の心をとらえる。なぜなら、それは、「千年王国」の「愛の海」とおなじ「海」の形象をともないつつ語られていることからわかるように——たとえこの場合は「なにも語りかけてこない荒涼とした海」だったとしても——かれら自身の生のありようとの奇妙な類似を連想させたからである。「静物画という不気味な芸術」の美しさは、いつぼうでは、死者の不動の顔のうえに日没の残照のように残されたほのかな美の薄明に通じるものがあり、それは「死の厳肅さ」「死の尊厳」という観念とむすびついて、死を詠う抒情詩や「棺に横たわる恋人」という文学モチーフを生みだしてきたが、そこには同時に、「死がもつとも高貴な恋人を自分にあたえてくれる」といった妄想が潜んでいる。そのような妄想をいだくのは、生きている恋人をもつ勇氣も可能性もない男であり、そうした妄想はじつのところ、身の毛のよだつ降霊術やおぞましい屍姦にまで通じている。医学的心理学的に見た場合、両者に共通しているのは、「自然な勇氣、あるいは自然な生に向かおうとする勇氣の欠如」であり、またそうすることの「不可能さ」「無能さ」である。静物画にもそれとおなじ「自然な生」の欠如と不可能性が認められるとき、「骨の髄まで痺れさす、静物画の息吹」をはらいのけるようにして、次の問いが発せられる。

そして静物画は、その奇妙な魅惑はやはりまやかしてではないのか。いや、ほとんど靈気ただよう屍姦ではないのか。⁴⁰

自然の生を離れ、絵のなかに封じこまれた静物の「不可思議な魔力」が、こうして死の世界を呼びさまし、

死を愛の対象とさえするとき、静物画はもはや「静止した生」であるにとどまらず、フランス語でいう「死せる自然」(nature morte)そのものと化す。そして、この「死せる自然」としての静物画に魅入られた者は、死を愛する倒錯の世界に入るのである。

右に見た、静物画をめぐる兄妹の会話が直前の章におかれ、読者はそれを通して「ある夏の日の息吹」の庭を眺めることになる。そのとき、聖なる庭の背後にあなたも透かし絵のように浮かびあがってくるのは、死の庭の相貌である。「色あせた花びらの雪」「花期のすぎた樹々」「自然の沈黙」「死の魅惑」「沈黙の葬列」「心臓は止まり、胸からえぐりとられ」等、死を表象する言葉におおわれた世界は、あかるい初夏の陽さしのもとで、その内部からしだいに翳りを帯びてくるように見える。静物画をじっと見つめていると、描かれた事物の「眼」が「おぞましさに満ち」たものとして見る者に迫ってくるという先の記述を思いおこせば、静物画として見られている死の庭で、「芝生の緑」が「まるで眼のように内側から濃い翳りの色を滲ませているように」見えてくるとしても、不思議ではないだろう⁴¹。その「芝生の緑」に花びらの「影がおちることもなかった」のも、あるいはこの死の庭が影を内部に抑圧した光の世界であり、そこには生と死の、光と影のコントラストが失われているからかもしれない。そのようにして二元的対立を失った世界は、「葬列」が同時に「自然の祝祭」であり、「死の魅惑」が同時に「生の魅惑」であるような二元的世界へと凝固し、同時に時間もまたそのながれを止め、その結果、永遠に静止した現在が出現する。永遠の現在に固定されたこの無時間的世界が死と呼応し、さらには死を愛する静物画の世界に通じることは、もはやいうまでもないだろう。ある夏の日の庭に顕現した「千年王国」は、そうした、絵のなかに閉ざされた永遠の美のユートピア⁴²死のユートピアであり、ザミヤーチンの「単一国」で「理想はもはや何事も」「……」起こらないところ「こそ存在する」と言われたのと同様、「千年王国」もまた、もはや「何事も起こらない状態」⁴²として、

永遠に静止した現在へと凝固するのである。

ザミヤーチンとムージルの「クリスタルのように純粹な」ふたつのユートピアは、こうしてともに反ユートピアへと凝結する。そこに、二十世紀の反ユートピア小説に共通する、実現可能になったユートピアの運命を読みとることもできるかもしれない。社会制度としての「単一国」と生の規範としての「千年王国」とのあいだには、その成立次元に無視しえぬちがひがあるとはいえ、しかし、「千年王国」も社会的ないし政治的なものと無縁に構想されているわけではなかった。ムージルが「千年王国」の運命を同時代の政治的運命と結びつけて考えていたことは、『特性のない男』第二巻の清書開始時に記されたものとしてW・ラッシュの伝える、次のようなムージルの覚書からもはっきりと見てとることができる。「〈別の状態〉の圏域のもつ問題性は、それが理解され、たんにひとつの異常なことだと見なされないうためには、時代と密接に関連づけられねばならない」〔43〕。「別の状態」ないし「千年王国」を時代の政治状況との関連のなかで捉えようとする作家の意図は、これ以外にも、のこされたいくつもの創作メモ等に、そしてまた、「もしかして千年王国の内実とは、はじめはただふたりのもとに現われるこの力が、万人の泡立つ共同体にまで膨れあがるということに他ならないのではないか」という、作品中にみられるウルリヒの言葉にもしめされているが、ヒトラーの「第三帝国」がイデオロギー的には「王国の神話」の流れをくむ千年王国幻想の所産であった〔44〕という時代の文脈を考えあわせるなら、「おなじようなことが起こる」現実からの解放の試みとしてはじまりながら、「呪術的なもの、神話的なものへの変貌」〔45〕をとげた死の世界へと収束していく「千年王国」の抑圧への道程には、ヒトラーの、このもうひとつの千年王国が、陰画のようにはらまれていたと言えるかもしれない。

だが、そのような歴史的状況との照応関係を否定できないにしても、「千年王国」にそそがれるムージル

のまなざしは、ただたんに、「千年王国」をヒトラーの「千年王国」と重ねあわせ、漆黒の反ユートピアとしての後者の運命を予言するというレヴェルにとどまっていただろうか。それにしては、「ある夏の日の息吹」の庭はあまりにも抒情的であり、その抒情はまた、あまりにも超越的な結晶化を果たしているように思える。それに、『特性のない男』におけるユートピア探求が、ユートピアの複数性を起点にもちながら、その存立の基盤が非現実の次元から実現可能な次元へと移されることによって、結局は「千年王国」という単一のユートピアへと収束していくという、これまでたどってきた収束のメカニズムをふりかえるなら、ユートピアにむけられたムージルのまなざしは、歴史的状況のみには還元できない原理のレヴェルにまで達していたはずである。そして、まさにその原理のレヴェルにおいて、死の直前に書かれた「ある夏の日の息吹」の章には、ユートピア的思惟の再生にむかう動きが遺言のように記されているのである。

「千年王国」が静物画の世界に通じる死のユートピアであることを身をもって体験した兄妹は、一元的な「花の葬列の呪縛圏」をのがれ、人間の欲望の根本対立をめぐる対話へと移行する。そこで展開される動と静の二元論的考察は、「食欲的あり方」／「非食欲的あり方」、「動物的なもの」／「植物的なもの」、さらには「西方的・西洋的・ファウスト的生感情」／「東方的・アジア的・非ファウスト的生感情」等に変奏され、いったんは動の極に属する「強烈な衝動の、破壊的かつ建設的ないとなみ」の名誉回復をもとめるかに見えるながら、奇妙な屈折を経て、最後に「アクティヴィスト」と「ニヒリスト」の対比へと行きつく。

ここで取りあげられた二種類の人間のあり方が、「特性のない」男と、およそひとりの人間が示しうるあらゆる特性をもつ男の対比に他ならないことは、むろんウルリヒにはわかっていて、一方を、神のさまざまな夢を夢見るニヒリストと呼び、他方をアクティヴィストと呼んで対比してもよかったで

あろう。だが、このアクティヴィストもまた、そのせわしない活動ぶりにもかかわらず、やはり一種の神の夢を夢見る者であり、明敏で着実にことを運ぶリアリストなどではけつしてないのだ。「どうしてぼくらはリアリストじゃないんだろう」と、ウルリヒは自問した。かれらはふたりともリアリストではなかった。ウルリヒにしろアガターテにしろ、そのことは、かれらの思考と行動から疑いようのないことだった。だがかれらはニヒリストであり、かつアクティヴィストであった。そして、状況しだいであるときはニヒリスト、あるときはアクティヴィストになるのだった。^{〔46〕}

未完に終わった『特性のない男』の最後に位置するこの「謎めいた一節」^{〔47〕}は、そこにニヒリストとしての兄妹による既存の現実の否定と、アクティヴィストとしての兄妹の行動への渴望との共存をみる論者によつて、作品が以後の「弁証法的過程」にむけて開かれていることの証しであると解釈される^{〔48〕}かと思えば、また、そこに兄妹の〈決断主義〉(カール・シュミット)のあらわれをみる論者によつて、そのニヒリスティックな〈魂〉の「アナキズム」がファシズムに通じる「政治的非合理主義」へ転じていくことの予示であると解釈される^{〔49〕}など、不可解な混乱をひきおこしている。この混乱は、「ニヒリスト」と「アクティヴィスト」を一般的意味での対立概念としてとらえることに起因していると思われるが、しかし右に引用したテキストを文字どおりに読めばあきらかなように、はじめ対立概念として登場した両者はいつしか一体となり、「リアリスト」にたいする対抗軸を形成するにいたっている。そしてそれは、「ニヒリスト」と「アクティヴィスト」の前二者が、「リアリスト」とは異なり、「神のさまざまな夢を夢見る」という属性を共有しているためなのである。ほんらい対立概念であつたはずの「ニヒリスト」と「アクティヴィスト」を強引に結びあわせるこの属性は、M・ルゼルケが指摘するように、あの「可能性人間」の属性にほかならな

い [91]。

可能性感覚を語る第一巻第四章では、その所有者である「可能性人間」について次のように言われていた。その種の人間は、現実感覚の持ち主によって空想家・夢想家・弱虫などと呼ばれたりするが、かれらが生きる「可能的なもの」の領域には、「神経のかぼそい人間の夢だけでなく、神の、まだ目覚めぬさまざまな意図もまた」ふくまれているのだ、と。それを思いだすとき、『特性のない男』の事実上の末尾で呈示された「ニヒリスト」「アクティヴィスト」対「レアリスト」の二項対立は、この長大な作品の開始直後に語られた「可能性感覚」対「現実感覚」の対立図式にはるか彼方から呼応するものとして、その意味をあきらかにするだろう。すなわち、「ニヒリスト」と「アクティヴィスト」は、その行動様式がいかに静と動に分極化していようと、「神のさまざまな夢」＝「神の、まだ目覚めぬさまざまな意図」を解き放つ可能性感覚を共有するがゆえに、現実感覚にしたがう「レアリスト」とは峻別されるべき存在なのである。そしてたしかに、ウルリヒはこれまで一度も「レアリスト」であつたことはなく、その可能性感覚を駆使して「状況しだいであるときはニヒリスト、あるときはアクティヴィスト」としてふるまってきた。

「アクティヴィスト」としてのウルリヒがおこなうユートピアの探求は、たえず現にあるものとは別のものを見る可能性感覚の視角にみちびかれた、ユートピアの自己展開の過程であつた。言い換えれば、複数のユートピアを自覚めさせる可能性感覚が、ユートピアに自己変革の機能をあたえていたのであるが、第二章以降、「ニヒリスト」としての兄妹に託された「千年王国」の探求において、ユートピアはその機能を喪失する。「千年王国」という究極の目的地に歩みいる過程で、ユートピアは「人間として生きるためのさまざまな最良のあり方」のひとつから「ただひとつの原理」にもとづくものへと凝縮され、それと同時に、それまでウルリヒのユートピア的思惟の源泉であつた可能性感覚もまた失われてしまうのである。「ニヒリスト」

とは「神のさまざまな夢を夢見る」者であるという、先にみた定義に厳密にしたがうなら、「さまざまな夢」の複数を放棄したそのとき、ふたりはすでに「ニヒリスト」としての資格を失っていたと言えるだろう。「ニヒリストであり、かつアクティヴィスト」という兄妹最後の自己規定は、したがってなによりもまず、可能性感覚の甦りを告げる言葉として読まねばならず¹⁾、裏を返せば、可能性感覚が甦るがゆえに、ふたりは「千年王国」の呪縛圏から逃れることができたのであるにちがいない。いつけん「完全で完成した」かに見える現実を虚構とみなす可能性感覚の視角が、現前するユートピアに向けられるとき、ユートピアの唯一絶対性はやはり虚構として相対化され、クリスタルの凝結を解かれるのである。

現存の秩序を超出する意識としての可能性感覚の射程は、かくしてユートピアの解体にまでおよぶ。その意味で、可能性感覚にはユートピア幻想を破壊する機能があると言えるし、またそれがユートピアを総体として否認するものではなく、変革への意志を再生するユートピア的思惟である点で、可能性感覚はザミヤーチンの「反エントロピー」と共通する思惟の構造を有してもいる。だが、ザミヤーチンの「反エントロピー」がたぶんにロマン主義的な破壊の同義語にとどまり、破壊の自己目的化さえ招くのにたいし、ムージルの可能性感覚は、現実、もしくは現実となったユートピアを「恐れるのではなく、課題として、虚構として取りあつかうひとつの建築意志、意識的ユートピアニズム」(傍点筆者)となつて、ひとつのユートピア幻想を破壊したあともなお、それに代わる別のユートピアを構想する力たりうるのである。『特性のない男』において、それが「帰納的志向のユートピア」の名で構想されていたことは、本書第一章第五節ですでに述べた。「目標設定としての帰納法」に依拠し、「閉ざされたイデオロギーを開かれたものと取りかえる」ことによつて新たな秩序の形成をめざすそのユートピア構想が、文学的にどのように形象化されうるのか定かではないにしても、そこにおいて「精神があるがままに受け入れる。いかなる固定した結果へもいたらぬ、

湧きいずるもの、咲きいずるものとして」という理念が掲げられているとすれば、可能性感覚の再生を果した兄妹の未来は、「政治的非合理主義」(K・H・ボーラー)に向けてではないのはむしろ、「千年王国」の延長線上にある「弁証法的過程」(H・プロストハウス)に向けてでもなく、むしろ延長線を切断した彼方に夢のように浮かびあがる未踏のユートピア、完成への意志をみずから拒む、いわば未完のユートピアにむけて開かれていると言えるであろう。

根拠にとほしい、美しすぎる推測だといわれるかもしれない。だが、この推測を裏づけてくれるテクストが、ムージルにないわけではない。それは、『特性のない男』とはまったく異なる枠組みのもとで書かれた、しかしやはりある種のユートピアをめぐる物語である。『特性のない男』は、二十世紀前半のドイツ語文学において「ユートピア的な感情・思考様式のもつとも強い詩的暗示力」^②を秘めた小説であるといわれ、それゆえムージルは広義のユートピア文学の系譜にその名を刻んでもいるのだが、じつはその彼に——一般にはあまり知られていない——SFの手法をもちいた狭義のユートピア小説の構想があったのである。

04—SF、あるいはユートピアの複数性——ムージル『南極の國』『惑星エト』

『南極の國』そしてまた『惑星エト』と題されたそのSF小説構想とムージルとの関係は、たとえば、科学革命期のドイツの大天文学者としてだれもが知っているケプラー(一五七一一一六

三〇)と、彼の知られざる空想科学小説『夢』との関係に比べられるかもしれない。むしろ、ちがいはある。なによりもまず、ケプラーの死後、一六三四年に世に出た『夢』が、フランス・ゴドウィンの『月の男』

(二六三八)に先がける史上初の近代科学的月旅行物語として、ジョン・ウイルキンズ、ヘンリー・モアからサミュエル・パトラー、ジュール・ヴェルヌ、H・G・ウェルズにいたる各種の宇宙旅行物語に「ユニークな影響」(豆)をあたえたのみならず、すでに生前の手稿段階でイギリスに伝えられ、ジョン・ダンの『イグナチウス——その秘密会議』(二六一)やジョン・ミルトンの『失樂園』(二六六七)にも取りいれられたのたいたし、ムージルのSF小説は、すくなくならぬメモや断片が長年にわたって日記に書きしるされはしたものの、『南極の国』の序章部にあたる部分の草案がわずかに遺稿として残されたにすぎず、独立した作品として世に出ることはなかった。結局は構想たるにとどまったこの幻の小説は、したがって二十世紀に爆発的興隆を見せたサイエンス・フィクションの分野はもろちんのこと、いかなる領域の作品にも、「ユニークな影響」をあたえる可能性をはじめから持ちえなかつたのである。

このいわば書かれざる小説の存在があかるみに出たのは、アドルフ・フリゼーの編集による三巻本の全集が相次いで刊行された一九五〇年代のことである。この三巻本全集の刊行によって、忘れられた作家として亡命地ジュネーヴに客死したムージルの再評価がはじまるのだが、読者および研究者の関心は主として膨大な遺稿部をふくむ『特性のない男』にむけられ、あるいは『生徒テルレスの惑い』以下の完成された作品にむけられ、全集の片隅に『南極の国』と題して収められたわずか八ページの奇妙な草案、そして「南極」「エト」という符号のもとに散見する断章と覚書は、ムージルのはなやかな復活のかけで眠りつづけた。いや、あたかも認知されぬまま夭折した異端の私生児のように、いまもなお眠りつづけている。

奇態なたとえだといわれるかもしれない。しかしたとえ、一八九九年頃の日記に書きとめられた『生体解剖氏』が、おなじく断片に終わつた草案でありながら、初期ムージルの文学的発想を原型的にしめすスケッチとして、あるいはまた『特性のない男』のはるかな源流として、しばしば引きあいに出されるのに

たしい、『南極の国』／『惑星エト』についてはほとんど問題とされることなく、たとえ言及されたとしても「空論的な小説」^[5]であるとか「奇怪なロマン」^[6]であるとかのレッテルとともに簡単にかたづけられてしまうことが多いとすれば、さらにまた、個々の作品論の場合は措くとしても、作家の作品総体を視野におさめてムージルにおけるユートピアもしくはユートピア的なものを主題とする論考すらもが、狭義のユートピア小説というこのSF小説構想の存在に一言もふれないとすれば、ムージル研究のこうした事態の方が逆にいささか奇態な様相を呈していると言えないであらうか。ムージルにSF小説の構想があったという事実は、それ自体——すくなくともわたしには——きわめて興味深い事柄であるだけでなく、これまで『特性のない男』におけるユートピア探究を中心に論じられ、構成されてきたムージルのユートピア概念にするどい異和の棘をつきつけずにはおかぬもののように思われるからである。しかし、それにしてもなぜ、この異和の棘はムージルにおけるユートピア(的なもの)を論ずる視野から排除されてしまうのであろう。

その無視できない要因として、A・シエーネの論考「ローベルト・ムージルにおける接続法の使用について」(一九六二)の果たした役割が考えられる。ムージルの再評価後ほどなく発表され、現在も研究上の基礎文献のひとつに数えられているこの論考のなかで、シエーネはいちはやくこの幻の小説構想にふれ、『惑星エト』および『南極の国』のそれぞれ一九二八年、三〇年の覚書に「エト星……ひとつの実験文化——これは本質的特徴においては現実の世界と一致する」「南極。枠組みを自伝的かつ現在に！」とあることを理由に、「このふたつのユートピア構想の非現実の接続法 (Conjunctivus irrealis) が『特性のない男』における可能の接続法 (Conjunctivus potentialis) に接近し」「この構想の原理的意図としてあったものがあの巨大なロマン・トルソーのなかに吸収されてしまったように思われる」と述べ、さらにそれを補完して、ジュール・

ヴェルヌ、H・G・ウェルズ、クルト・ラスヴィッツからハンス・ドーミニクを経て大量生産されるにいたるサイエンス・フィクション、この種の「科学技術的未来小説」は現実によって追いつかれてしまい、「ルポルターージュ」へと格下げされてしまった、と断言したのである^[56]。

ムージルのSF小説構想が『特性のない男』に吸収されてしまったというシエーネの考えは、あとで述べるように、SFという小説ジャンルにたいする偏見を背景にうかがわせる、資料的裏づけに乏しい推測であると言わざるをえないのだが、にもかかわらず、それはW・ベルクハーンの『ローベルト・ムージル』（一九六三）に受け継がれ、広く流布していく。ローヴォルト社のロ・ロ・ロ叢書の一巻をなすこの書は、一般の読者を対象とするムージルへの入門的案内書であると同時に、カール・コーリノーの『ローベルト・ムージル』（一九八八）が出るまではムージルの唯一まとまった伝記書であり、したがってある意味ではシエーネの論考以上の影響力をもったと考えられるが、ベルクハーンはそこで「モラルの実験小説」たるこのSF小説構想を、『特性のない男』の前身をなすいくつかの草案のひとつに組み入れてしまったのである^[57]。

こうして異和の棘は抜かれる。シエーネとベルクハーンによって『特性のない男』に従属させられた『南極の国』／『惑星エト』は、その後独立した作品構想としての資格を剝奪され、M・ゼーラにいたっては、『見いだされた楽園』と題されたその最初期の草案（一九二一年）のみが、しかも『特性のない男』の一九二〇年代半ばの草稿である「楽園への旅」の章との関連をせしめずものとして取りあげられるにすぎない^[58]。

しかし、ムージルのSF小説構想がこのような扱いを受けるにいたる経緯のそもそのの起点にあったシエーネの論考に立ちかえれば、先に述べた彼の見解には重大な誤りが認められる。まずはじめに、小説の枠組みを自伝的かつ現在にとる、小説にえがかれるユートピア世界の本質的特徴が現実の世界と一致する、という覚書についてであるが、一九二一年に「われわれの精神的状況にたいする一種の諷刺」をもくろむ

「ユーモア小説」⁵⁹として着想されて以来、自伝的要素と時代諷刺のモチーフは『南極の国』／『惑星エト』にいつかんに流れている主要な契機であって、『特性のない男』第一巻が成立する一九三〇年頃に突然浮上してくるものではない。当初「ユーモア小説」として着想された段階では、純粹にユートピア的な世界における「無限の別の可能性をえがくこと」によって⁶⁰「おこなわれるはずであった時代諷刺が、第一次世界大戦後の政治状況を経て、一九三〇年以降、より直截な「時代描写」⁶¹を取りいれる方向にむかったのは事実である。だがそれは、シェーネのいう「非事実の接統法」、すなわち現実とは別の世界をえがくSF小説の枠組みそのものの放棄をただちに意味するのではなく、おなじく一九三〇年の覚書に「現在の時代状況に潜むさまざまな展開可能性が戯画化されてえがかれる」⁶²と記されていることを考えるなら、「時代描写」を取りいれることよって「ユーモア小説」から「モラルの実験小説」⁶³への発展をとげた（一九二八年）このSF小説構想に、あらたに反ユートピア的な契機が導入されることの示唆と解すべきであろう。すくなくともムージルにSF小説構想を放棄する意志のなかったことは、『特性のない男』第一巻の原稿が完成する三か月前、一九三〇年五月のフランツ・フライ宛ての手紙で「このロマーン『特性のない男』の次に取りかかるつもりは、あるユートピアの実験風景」⁶⁴を予告する彼自身の証言を見ればあきらかであり、また事実、この「次に取りかかるつもりは、あるユートピアの実験風景」⁶⁴についての覚書は、『特性のない男』第二巻の執筆と平行して、一九三七年の日記までつづくのである。

着想を得て二十六年、『特性のない男』にも匹敵する長期間にわたってムージルがあたためつづけたSF小説構想の行方を、以後追うことはできない。『特性のない男』第二巻の完成をはたすことなく、一九四二年、脳卒中の発作にたおれたムージルに、「次に取りかかるつもりは、あるユートピアの実験風景」⁶⁴を書く時間はあたえられなかった。ただ一度、一九三七年の覚書のひとつに、とはつまり『特性のない男』の完成を待たずして、

「すぐに開始することができる」〔65〕と記されているが、現在にいたるまでその意思の実現を裏づける資料は見いだされていない。だが、たとえ事実、書かれなかった小説の非在の場をうつろに指ししめすだけだとしても、それはシエーネが言うように、この小説構想の「原理的意図としてあったもの」が失われたからではないだろう。まして、小説の内容が現実を追いつかれてしまったからでもないだろう。地球を舞台にしては検証しえない「モラルの実験」を「星の実験室」〔66〕でおこなうというこのSF小説の原理的意図は、すくなくとも一九三七年まで、「エト十自伝」〔67〕、すなわち「まず現代がえがかれる。……」それからエトの描写」〔68〕という二部構成の小説構想のなかに生きつづけたのであり、また小説の内容自体も、現実世界における科学技術の飛躍的進歩によって「ルポルタージュ」と化してしまうような「科学技術的未来小説」とは次元の異なるものだったからである。

「科学技術的未来小説」(der technische Zukunftsroman) という言葉でイメージされるものが、完成の域にたつた科学技術によって実現されるであろう、はるかなる未来社会をえがく小説であるとすれば、『南極の国』／『惑星エト』はその種のジャンルに属する作品ではない。『南極の国』の覚書のひとつには、その国の住人について「かれらは技術的な面では人類 (die Menschen) auf der Erde) より進歩してはいない」〔69〕と書かれているし、一九一〇—一九一二年に成立した『南極の国』の序章部で呈示される時間枠も、一九一〇年、すなわち当時の現代なのである。ではこの科学技術小説でも未来小説でもない作品はいかなるレヴェルでSF小説であり、またユートピア小説であるのか、まずは遺稿として唯一まとまった形で残されたこの序章部を手がかりに、以下順次、構想の発展段階を追って検討していきたい。

小説の仕掛けとして導入されるのは、一九一〇年、七十六年ぶりに地球に接近したハレー彗星である。不吉な出来事の前兆として古来おそれられてきた彗星の出現は、二十世紀においてもあらたに疑似科学的装い

をまとして一部の人びとを不安に陥れていた。この年の五月十八日に地球がハレー彗星の尾を通過するという天文学者の予報は、安全だと保証する専門家の意見にもかかわらず、二年前のモアハウス彗星の尾から青酸ガスが検出された事実と結びついて「青酸ガスが入りこまないように窓に目張りする人たち」を生み、またいつぼうで「その筋」の計算は間違っており、ハレー彗星の頭が地球に衝突するだろうという説が当然のことながら流れ、「彗星衝突の混乱にまきこまれる恐ろしさから自殺した人たちもいた」^{〔20〕}という。

このような悲喜劇的状况は『南極の国』においてもほぼ忠実に再現され、隕石の落下にそなえてベッドの上に雨傘をかざす人びと、青酸ガスから身を守るために酸素ボンベを携える人びと、あるいはまた、他人よりも十五分間だけ生き長らえさせてくれるよう神に祈る人びとのうちに戯画的にえがきだされている。だが破局は起こらなかった。それだけではない。ハレー彗星はその接近をかたずをのんで待ちうける人びとの前に姿すら見せず、「大きな失望だけ」^{〔21〕}を残して地球のはるか彼方を遠ざかってしまったのである。『南極の国』の序章部は、その理由の解明にうちこむひとりの若い科学者Xの奇矯な「理論」によって、読者を一挙にSFの圏内に引きこんでいく。

Xの「理論」の起点にあるのは「数学と物理学にもとづく畏敬すべき天文学」^{〔22〕}への絶対的信頼である。天文学者の推論は正しかった、にもかかわらずそれが事実と合致しなかったのは推論の前提に誤りがふくまれていたからにちがいない、と彼は考える。だが天体の運動を規定する力の法則を疑うことができず、計算のもとになる天体の大きさおよび天体間の距離もまた正しかったとすれば……。この仮定のもと、Xは厳密な計算に立脚してひとつの結論にたどりつくのである。「地球のすぐ近くに、ぼくらがまだ知らない天体があるにちがいない。ほんの数百万キロしか離れていないところに！ わかりますか!!! たった二、三百万キロなのに、今日までだれもそれに気づかなかったのです！」^{〔23〕}。

地球の至近距離に存在する天体を想定することによってハレー彗星の謎の軌跡を説明しようとするXの「理論」は、語り手の「わたし」が言うように、いかにも「ありそうにもない空想的なもの」〔24〕にすぎない。だが未知の天体の存在という仮説を形成するにいたる推論の形式に着目すれば、それが科学的探究の場で一般にアブダクションと呼ばれる仮説形成の手続きに照応していることが認められるであろう。すなわち、

- 1・驚くべき事実Cが観察されている。
- 2・しかし、もしもAが真であるならば、Cであることは当然の事柄であろう。
- 3・それゆえ、Aは真ではないか、と考える理由が存在する。

という形式をとって、「或るものがあるかも知れぬことを示唆する」〔25〕アブダクションの論証的操作は、予測に反したハレー彗星の軌跡（「驚くべき事実C」）を前にして、未知の天体の存在（C）を説明しうる仮説（A）を導きだすXの推論過程をささえるものであり、その意味で、導きだされた仮説がいかに空想的に思われようとも、推論形式それ自体は科学的方法に準拠していると言いうるのである。もともと、C・S・パースの考えた「アブダクションの論理」とは、「科学的探究の遂行者が、自らの現象把握に関して、それを〈合理的〉であると納得するところに働いていると考えられる、論理」〔26〕であるらしいから、Xが提出するがごとき奇矯な仮説は現実の科学研究の場においては成立困難であろうが、しかし小説はあくまで虚構の世界である。そして、「SFとは、仮説形成とアブダクション（Abduction）からなる物語」〔27〕であるというウンベルト・エーコの言葉にしたがうなら、アブダクションの手続きを踏み、未知の天体を可能的な存在として虚構する作家の頭脳には、まぎれもなくSF的発想が息づいていると言えるであろう。

未知の天体の存在という、のちの『惑星エト』構想に結びつく第一の仮説は、だが仮説をみちびく途上の計算ミスのゆえに修正を余儀なくされ、その結果「これまで知られていない、とてつもなく巨大な山脈」⁷⁸が南極にあるという第二の仮説に取って代わられる。『南極の国』序章部は、この第二の仮説を立証せんとして精神に異常をきたしたXの、しかし恐るべき真実を語った手記を語り手がこれから公表するという設定で終わっているのだが、これとほぼ同時期の一九一一年十月に書かれた草案「見いだされた楽園」／「集団自殺」では、いずれの仮説にもとづくものか判然としないものの、ある異世界への旅がえがかれており、そこにおいても小説世界を成立させる不可欠の要素としてSF的手法が用いられているのを見ることが出来る。

異世界への旅を試みるのは、自然科学に精通している「彼」ないし「わたし」と、精神科学を愛するアンナおばさん、それに「彼」の婚約者キティ、「検事」、「詩人」をくわえた計五人である。「見いだされた楽園」に先立つ標題のない草案には、「わたし」三十一歳、若くして夫をなくしたアンナおばさん三十七歳という、ムージルと彼の妻マルタを思わせる自伝的設定がすでに見られるが、それはともかく、一行が異世界に向かうさいの方法についてはこう語られている。「彼は微弱な未知のエネルギーの流れをつきとめ、生化学的方法を考案する。かれらは小さな包み状のものに束ねられ、液体に浸され、気化した状態で運ばれる。かれらの身体は水に触ればそれだけでもとの形状に復する」⁷⁹。『南極の国』序章部よりも完成度の低い草案のためであろうか、未知の天体を想定するにいたる推論と比べて、SFとしては説得力にとぼしい方法であることは否めない。ムージルの関心は異世界を訪れるための科学技術的に妥当な方法よりもむしろ、これから訪れる異世界の基本的ありように向けられているようである。

そこでは生命は地球とおなじ起源を有しているのだ。だが双方における生命の到来はきわめて初期の段階でおこなわれ、その後パラレルな発展はとげなかった。まず第一に、太陽に耐性をもつ種族は形成されなかった。人間は、たとえば子ども頃はかぶと虫の幼虫のようなものであり、それが木の幹や沼で生長して少女になる。根本的なちがいは、自然淘汰の原理が物理的な生存競争ではなく、心理的な生存競争、つまり可能なかぎりの倫理的豊かさを求めるものであることだ。^[80]

地球とおなじ生命の起源を有しながら生物学的にも社会規範の面でもまったく別の発展をとげたこの世界で、訪問者たちは「さまざまな変化にさらされる」。先に述べた方法で異世界に到着した一行は、雨に打たれて「再生」をはたし、けれども服が再生しなかったために全員裸で立ちつくすのだが、羞恥の苦痛をいやすかのように語られるアンナおばさんの言葉——「もしかして、ここでは裸はみだらなものではないかもしれない」^[81]は、地球の文化が築きあげた秩序と規範が異世界では通用せず、そこで遭遇する「無限の別の可能性」によってゆらぎ、解体されることの予告として読めるだろう。いま紹介している草案では、この世界では哲学も文学も奴隷の仕事であるという事実、あるいはまた、ある市民の家庭に「二人目の夫のように」^[82]迎え入れられた「わたし」が、夫婦とともに三人でベッドに入りながら嫉妬されることもないという出来事のうちに、わずかにそのゆらぎが萌しているにすぎないのではあるが、そのような「さまざまな極端な生の可能性」^[83]をえがくことによつて現存の秩序を根底から覆そうとする「ユーモア小説」の試みは、けつしてそのまま実現されることのない生のかたちのかたのなかに、ありうるかもしれぬ生の可能性の種子をまく「さまざまな精神的実験」^[84]として、以後の小説構想に受け継がれていくのである。

一九一八年頃からふたたび日記に登場する『南極の国』についての覚書には、第一次大戦後の社会状況を

反映してのことであろう、「戦後移住したドイツ人」⁸⁵というあらたなモチーフが見られる。「ボルシェヴィズムの未来」と「ナシヨナリズムの不可避の到来」を不快に思う主人公が、おば・哲学者・神学者・実務家とともに「南極の国」と思われる異世界におもむくという設定であるが、時代諷刺はまだ前景にあらわれてはこない。SFの科学技術的側面についても、肉体の化学的分解／翌朝の再合成の形式をとる睡眠について語られてはいるものの、やはり付随的なものとどまっており、ムージルの関心はここでも異世界のありように向けられている。そこにおいて、文学の不在、利他主義、単調な生活、にもかかわらず旺盛な労働意欲といった、ユートピア世界を典型的に特徴づける生活形態が項目的に羅列されるなか、とりわけ注意をひくのは性生活にかかわる記述である。「性欲を、かれらはサトウルヌス祭のりに動物の属性によつて処理する」⁸⁶。ここでいう「動物の属性」を発情期のようなものと解してはならない。はじめに異世界の人間の子どもをかぶと虫の幼虫のごときものとして考えたムージルは、一九二〇年の覚書では生殖行為に関しても「ヒドラの再生」に似た「生殖を目的とする情痴殺人」、すなわち、相手の肉体を切りきざむと、切りきざまれた各部分が再生してもとの身体に復するという形式を想定し、「両足を再生するために、こうしてかつて脳だった部分が使われた女」⁸⁷「そのような女のエロティシズム」⁸⁷について語っているのである。この時期の覚書にはさらに、「勃起すると、身体全体が膨張する男たち。縦も横も四倍になる」⁸⁸という奇抜な発想がしるされるかと思えば、性交時に腕の一本がペニスに変わるイカ等、動物・昆虫の多種多様な生殖形式を報告した書物からの抜萃が「南極」の符号のもとにおこなわれるなど、ユートピアにおける性のあるいようには並々ならぬ関心がはらわれているけれども、こうした性をめぐる考察がいかに奇怪なものに見えようと、その基底にはムージルのSF小説構想の核心にふれるひとつの問いが潜んでいることを見おとしはならないだろう。おなじく一九二〇年の覚書に、ムージルはこう書きしるしている。

人間と犬との関係できわめて重要なのは、その寿命が異なっていることである。人間は数頭の愛犬を合わせたよりも長生きをする。人間と犬の平均寿命がおなじだとしたらどうだろう？ あるいは女だけが犬とおなじ寿命になって、男は今のままだとすれば？〔89〕

同様の問いは、ほぼ十年の時を隔ててもう一度くりかえされる。

夫もしくは妻が犬か馬とおなじ寿命になる。二人が心から結ばれているのは八年ないし十四年。愛はどのようなものになるだろう？〔90〕

SF小説という、想像力の最大限の振幅をゆるす枠組みのなかに、リアリズム的枠組みをもつては不可能な極限的仮定を投げいれて「……だとしたらどうだろう」と問う。この問いこそはおそらく、ムージルみずから「モラルの実験小説」と呼んだSF小説構想の中枢に位置する問いであり、二十年にわたって構想をささえつづける原動力となるものであったにちがいない。そして、この問いの発せられる地点から見ると、異世界の「動物の属性」を付与された奇怪な性の形式もまた、つまるところ、そのとき「愛はどのようなものになるだろう？」という思考実験を発動させる極限的仮定にほかならないであろうし、この仮定を『南極の国』に導入したムージルは、そのとき、現実の愛の枠組みを破砕する、こう言ってよければ新しい愛のかたちを幻視していたはずである。たとえそれが虚構のユートピアに具体的な像をむすぶことなく、ついに幻のままに終わったとしても。

『南極の国』構想は、以後、フランツ・ヴェルフエル（一八九〇—一九四五）を筆頭に同時代の文学者を痛烈に批判する「地獄の農場」⁹¹ないし「文士農場」——「文士たちをかれらの脂肪でもって焼き肉にしなればならない」⁹²——のモティーフをくわえて、一九三〇年には「枠組みとして時代諷刺」⁹³を前景に出す段階に達するが、ユートピアにおける「卑しさのない生活」「共同体の別の状態」⁹⁴を断章としてえがくという計画は実現されぬまま、その後ほどなくこの作品構想自体が日記から姿を消していく。これと入れ代わるように、それまで『南極の国』の陰に隠れていた『惑星エト』構想が、一九三〇年以降、前面に出てくるのだが、そこにはおそらく南極探検の飛躍的進展という事態が介在していたであろう。というのも、一九一〇—一九二二年にアムゼン隊とスコット隊が相次いで南極点に到達することによって新たな局面を迎えた探検史は、一九二八年以後、南極大陸上を航空機が飛ぶ時代となり、一九三〇年の時点でもはや南極は未知のユートピアの存在を想定しうる人跡未踏の地ではなくなってしまうかと思われるからである。その意味で、『南極の国』構想は現実には追いつかれてしまったと言えるかもしれないが、しかしそれはあくまでユートピアの場所をめぐる問題であって、この小説構想の中枢にはらまれた問いは、主要なモティーフとともに——『特性のない男』ではなく——『惑星エト』構想に発展的に吸収されていくのである。

一九二〇年代の初頭にはじまる『惑星エト』のための覚書には、その意図をはかりかねるものもふくめて、じつにさまざま着想が乱雑に書きとめられている。したがって、そこからひとつの作品構想の輪郭を思いえがくことは必ずしも容易ではないけれども、一九三〇年以降くりかえし語られる「農場生活」⁹⁵のモティーフは、この小説構想をささえる基本的枠組みを浮かびあがらせてくれるもののように思う。

「人間を動物心理学の視点、たとえば犬の視点から考察すれば」「おそらく動物の全神経構造を人間の精神に移しかえることも可能であろう」⁹⁶——この可能性の研究のために考案された「農場」は、人間と動物

をへだてる障壁が取りはらわれた世界であり、そのような世界として、あの「……だとしたらどうだろう」の問いが発せられる思考実験の場となる。たとえば、奇声を発しながらボール遊びをする人間、ひとりの女を獲得して目的を果たした気になり、飲み食いもつとも重要なことのひとつであるような人間のふるまいを、犬の行動様式と同一のレヴェルでとらえることができるとすれば、人間と犬の「共同生活の場で、犬が人間の教師になった」⁹⁷としても、おかしくはないであろう。あるいはまた、「人間が「……」酔っぱらって動物のようなふるまいをする」のであれば、「もしや動物は、酔っぱらって人間のようなふるまいをしないであろうか？ 話をし、本を読み、書評をする」⁹⁸というように……。このような「イローニッシュな裏返し」⁹⁹の現象は、『南極の国』における「文士農場」の着想のうちにすでに懐胎していたものと思われるが、おなじく『南極の国』の遺稿部の覚書に示された「動物たちの倫理会議」¹⁰⁰には、それがより鮮明なたちで表われている。そこで社会倫理の問題を討議するのは動物たちであり、愛国者、狂信的国粋主義者、観念論哲学者として登場を予定されている人間はすべからず、「かれらの主張が正しい帰結にいたるまで、みずから主張する生を生きねばならぬ」¹⁰¹という罰に処せられるのである。

「神曲の戯画化」として構想されたこの「処罰された者たち」¹⁰²のモチーフは『惑星エト』にも受け継がれ、そのために「星の実験室」である「農場」は一挙に反ユートピアの様相を呈するにいたるのだが、たとえばそこに「蟻人間の国」における「苔打ち刑」¹⁰³があり、「罪人矯正施設における強制労働」¹⁰⁴があるとしても、そしてまた、「革命の真の道徳理論家」にして「魂の農場の指導者」であるひとりのロシア人が「ある一頭の牛に密告されてGPUに銃殺される」¹⁰⁵といった事件が起こるとしても、それはただちにジョージ・オーウェルが『動物農場』（一九四五）でえがいてみせたような、警告ないし告発の書としての反ユートピア小説に『惑星エト』がなることを意味するのではない。動物寓話の伝統につらなる諷刺的精神が

明白に認められるにもかかわらず、惑星エトはあくまで「さまざまなユートピアのひとつ」〔106〕である。ムージルは言う。それはおそらく惑星エトが、南極の国と同様に、「さまざまな実験領域に分割された世界」〔107〕であり、その住人が「知的に可能なあらゆる状況を生きている」〔108〕からであろう。『惑星エト』の覚書のひとつに「人類に形而上学的使命があるとすれば、それを遂行するためにいかなる可能性も圧殺しないことがその前提条件となる」〔109〕と記したムージルにとっては、人間の生が本来はらんでいられるあらゆる可能性を、それがいかなるものであれ、現実の固い枠から解き放つ場こそがユートピアであり、『惑星エト』における「イローニッシュな裏返し」の世界も、それが「生の多様性」〔110〕を産出する実験室として多様な可能性にむけて開かれているかぎり、「さまざまなユートピアのひとつ」でありつづけるのである。

「生の多様性」を産出する実験の場としてのユートピア——それは性と愛の制度をめぐる領野にも立ちあらわれてくる。ムージルはこの領野に、「恋人の代用」としての「セックス職員」〔111〕であるとか、女が男を「性的に支配する」〔112〕関係だとか、あるいは逆に「反ユダヤ主義の代わりに女性憎悪にもとづく国家を建設する」〔113〕といった考えをもちだしてくるが、このような容易に反ユートピアへの反転をひき起こしうる諷刺の身ぶりにもかかわらず、不思議なことにそこには、古典的ユートピア文学が執拗に追求し、二十世紀の反ユートピア文学がその伝統を利用して黒い諷刺の対象とした性の管理制度、たとえばザミャーチンの『われら』における性の「クーポン券」のようなものを見いだすことはできない。反ユートピアもしくはディストピアが、政治的・社会的現実には潜む否定的傾向をグロテスクに拡大して実現可能な未来図のなかに投影したものであるとすれば、惑星エトに見られるのは、反ユートピアが内包する現実の諸契機よりもむしろ「実現可能な〈純粹な遊び〉としての幻想」であり、この戯れとしての幻想が「かならずしも不可能でない人間社会逆転の欲望」と結びつくとき、エト・ユートピアは「〈純粹な〉幻想的形式と秩序転覆の欲求」

とが表裏一体をなす〈さかさま世界〉に近いものとなる¹⁴⁾。

ただし、惑星エトの「イローニッシュな裏返し」は秩序破壊のみをこととするのではない。一九三〇年代の初頭に「アマンドウスとアマンダ」の名で「女が男性化し、男はホモセクシュアルに染まる」¹⁵⁾一対の男女をエトの恋人モデルとして呈示したムージルは、『惑星エト』構想の最終段階にいたってさらに、「女の一卵性双生児が大勢いる国。双子のふたりがひとりの男との結婚を許される」「別の国では、男の双子が女の双子との結婚を許される」「七、八人の兄弟と、すべての家事をするひとりの女の結婚」¹⁶⁾といったさまざまな婚姻形態に思いをめぐらせているが、そのような多様な愛のかたちは、現存の一夫一婦制の秩序を揺りうごかすだけでなく、良俗の殻に閉ざされた愛の秩序体系を穿ち、そのなかに封じこめられてきた愛の多様性をはるかな夢想の開放系のなかに連ねだすものでもあるだろう。エト・ユートピアに胚芽として宿された愛の多様性は、もしもそれがすぐれて豊饒なイメージを喚起する形象化をはたし、無限に増殖するアナーキーな性的交流の風景をえがくことができたなら、ムージルにとつての〈愛の新世界〉(フリーエ)を切りひらく力となりえたかもしれないのである。

異世界を舞台とする「ユーモア小説」として企図されたムージルのSF小説構想は、「無限の別の可能性」を追求する過程で、リアリズムの枠組みをもってしては困難な仮定をつぎつぎと導入し、こうして多様な生の可能性それ自体を問うユートピア小説の様相を呈するにいたる。「モラルの実験風景」¹⁷⁾をえがこうとするその試みが、シエーネのいう「科学技術的未来小説」といかに異質のものであるか、もはや説明をくわえる必要はないだろう。それが『特性のない男』に吸収されえぬ独自の構想であることも、わたしにはすでに明らかだと思われるが、この点については事情はやや異なってくる。というのも、シエーネ以後はじめて、そしてわたしの知るかぎり現在にいたるまで唯一、このSF小説構想を詳細に論じたCh・ヘーニツピは、こ

れまで本章で引用してきたテクストと覚書をすくなくともデータとしては知っていたにもかかわらず、「ユートピアの生命は現実とへおなじ起源を」有するものとされているために、ムージルにはやがて地球と『エト』を隔てる天体間の距離が疑わしくなる」⁽¹⁸⁾と言い、慎重に言葉を選びながらではあるが、このSF小説構想が『特性のない男』に吸収されていくというシェーネの見解を追認する姿勢を見せているからである。

奇妙な考えだと言わねばならない。地球と「おなじ起源を」有しているからこそ、にもかかわらず異なる発展をとげた異世界は、われわれの現実があるいはそのようでありえたかもしれないもうひとつの現実を表出する虚像となつて、堅牢な唯一絶対性をよそおうこの現実の相対性、無数に潜在する可能的世界のなかからただひとつ切りだされて成立したこの現実の偶然性を照射するのであり、また、この現実の偶然性に逆照射されてはじめて、異世界における生の多様性産出の実験は、純粋な幻想の戯れにとどまらぬ、多様な生の可能性を問う文学の営みになるであろう。D・スーヴィンによれば、SFとは、「認識に関する効果をもつ文学」、すなわち「あらゆる時代の規範を「……」一般性をもたぬ可変的なもの、それ故に認識作用をもつ視線に従うものと見做す」文学であり、「作者の環境を静止的に映し出すことよりも、動的に変革することへむかう創造的探究」である⁽¹⁹⁾。この探究をおこなうための装置として、SFは「作者の経験する環境に代わる想像力による枠組み」⁽²⁰⁾を設定するのだが、ヘーニツヒには、そしてシェーネにも、そのようなSFの企てと方法はまったく理解されなかつたといつてよい。ヘーニツヒにとつてSFとは、「科学的蓋然性がきわめて高いという印象をあたえようとこれ努める」荒唐無稽な科学主義的空想の産物にすぎず、したがって科学的妥当性を意識的にしりぞけている『南極の国』／『惑星エト』は、SFとのすくなくならぬ類似点を認められながらも、SFジャンルに属する作品として認知されてすらいらない⁽²¹⁾、シェーネにとつてSFと

は、「科学技術的未来小説」の別称でしかなかった。幻の小説構想を、SFとは異なる「諷刺的・ユートピア的実験小説」と規定することによって『特性のない男』との差異を解消するヘーニツヒと、それがSFであるがゆえに『特性のない男』に吸収される必然を説くシエーネ。一見して異なる前提から出発するかに見えながら、しかし共通して〈SFⅡ科学技術的未来小説Ⅱ通俗小説〉の図式にとらわれた二人は、こうしてともに、SF的想像力をばねに飛翔するアナキーな思考実験を経験世界の枠組みのなかへと拉致し、そうすることによって、ムージルのSF小説構想がはらんでいた文学的可能性の萌芽を抹消するのである。

ひとりのスタニスワフ・レム(一九二一)を生む代わりに、一九六〇年代以降「ペリー・ローダン」シリーズが席捲することになる国の、しかも制度化された文学研究の場には、たとえば「科学と技術はSFでえがかれるもの」の前提ではあるが、けっして中心的テーマではない⁽¹²⁾という声も届きにくかったかもしれない。だが、前述したスーヴィンのSFの詩学にくわえて、「サイエンス・フィクションは慣れ親しんだ公認のカテゴリーおよび座標系を超出しようとするトレーニングである」⁽¹³⁾というM・シュヴォンケの定義、さらには現代オーストリアのSF作家H・W・フランケ(一九二七)による「SF作家はわれわれの世界像の相対化に重要な貢献をおこなっている」⁽¹⁴⁾という主張に耳をかたむけると、わたしたちはそこに、SFの大胆な試みとムージル文学の原基的立場、とりわけ彼のユートピア的思惟の基軸をなす可能性感覚との意想外の親和性を聞きとることができるだろう。『特性のない男』において、「存在することも可能であろうすべてのものを考え、存在するものを存在しないものよりも重要視しない能力」であると定義された可能性感覚は、現実を「虚構」と見なすその視角によって、現実という「固定した枠」を超出しようとする意識となるが、これは現実の規範を「一般性をもたぬ可変的なもの」と見なし、「慣れ親しんだ公認のカテゴリーおよび座標系」を超出しようとするSFの志向とその方向性をおなじくするものだと言いうるし、ま

たそれゆえにであろう、「われわれの世界像の相対化」にむかう精神の運動をSFと共有してもいるものがある。

この可能性感覚の所有者ウルリヒを主人公とする小説『特性のない男』をSFだと言うことは、しかしながらできない。可能性感覚が目覚めさせる「現実となりえたかもしれない無数の可能性」のひとつひとつを潜在的ユートピアと想定し、これを抽出・発展させる「実験」を「ユートピア」の同義語とする、そしてまた、ウルリヒが追求する「モラル」が「さまざまな可能性の無限の全体を生きること」を意味しているなど、『特性のない男』には『南極の国』／『惑星エト』とおなじ「生の多様性」産出の実験に通じる回路が組みこまれているにもかかわらず、ユートピア探究の「大実験地」を「星の実験室」ならぬ「この世界」、すなわちわれわれの経験世界にもとめたウルリヒは、「精密な生のユートピア」をはじめとするいくつかのユートピアを観念として思いえがきはするものの、アガートの出現以後、すでにくりかえし述べているように、兄妹二人の神秘的愛の共同体である「千年王国」の約束にとられ、「千年王国」での行動規準を「ただひとつの原理」とすることによって、みずから「生の多様性」を排除していくのである。

一般に「終末論」は、「神の救済計画にあらかじめ記されたただひとつの歴史過程」について語るがゆえに、「さまざまな別の可能性」を夢想する「ユートピア」とは区別されるべきものだといわれる¹²⁶。その名称において終末論と無縁ではないムージルの「千年王国」もまた、それが現実とは別の世界を経験世界の枠組みのなかで求めようとする以上、破壊された現実の空白を埋める「ただひとつの原理」となって「さまざまな別の可能性」を否定する絶対的境域に結晶するほかになく、それゆえに、SF的想像力によって「さまざまな別の世界」¹²⁶を構想するエト・ユートピアの原理とするべく対立せざるをえないのである。人間の未来に待ちうける複数の可能性のうちのひとつを唯一最善のものに見なさないSFは「多元主義の」

立場をとる、とシュヴオンケは言う「四。」さまざまなユートピアのひとつ」として多様な生の可能性を開くエトの世界もまた、そのようなSFのひとつの風景として、ユートピアの複数性にむけて開かれていると言えるであろう。

可能性感覚を共有する地点にむけて接近していくかに見えたムージルのSF小説構想と『特性のない男』は、経験世界を枠組みとする後者が「千年王国」へと不可避的に収束していくにつれ、こうしてふたたび双曲線の軌跡のように乖離していく。だがここで、この乖離の軌跡が一九三〇年代の共時的空間にえがかれたものであることの意味を考えてみよう。

『特性のない男』だけを読むなら、第二巻以降、ユートピアの複数性はしだいに抑圧されていくように見える。その理由として、これまで、ウルリヒが「千年王国」の要求する「ただひとつの原理」にとらわれるためであるとか、アガートと出会ってはじめて実現可能なユートピアが出現したためであるとか、あるいはまた、右に述べたように、経験世界の枠組みのなかである絶対的な世界をもとめようとすれば、現実の歴史過程はただひとつなのだから、不可避的に他の世界の存立可能性を否定せざるをえないであるとか言ってきた。こうした言葉で言いたかったことの核心にあるのは、ある共同体が——たとえそれがたった二人からなる共同体であったとしても——現実世界で唯一絶対の尖鋭な理想像をかかげ、それを現実化しようとするとき、はじめは既成の現実にたいするアンチテーゼとして有効に機能しえたその理想は、しだいにそのさらなる絶対化をもとめて共同体の内部にいる人間を抑圧するようになる、ということであった。この認識は、基本的にザミヤーチンの「エントロピー」批判とも重なってくる考えであり、そしてじじつ、ユートピアの複数性を抑圧された作品世界は、その果てに「千年王国」という反ユートピアを成立させた。しかし、『特性のない男』の外に目をむければ、そこには一転して、単一の反ユートピアとは対照的な光景がひらけている。

いくつもの奇想が、まるでみずからの表現不可能性と戯れるかのように乱舞し、いくつもの〈愛の新世界〉が——まだ萌芽状態ではあるにせよ——生の多様性を謳歌するかのように立ちあらわれてくる。『惑星エト』のそうした豊饒な可能性をほらむ風景を、ムージルが『特性のない男』の執筆と平行して、ウルリヒとアガリテの抑圧へといたる道程と並走しつつ素描していたのだとすれば、仮にウルリヒが「千年王国」へといたる過程で可能性感覚を喪失しようとも、ムージルがそれを失っていたはずがない。

だからこそムージルは、「千年王国」が静物画の反ユートピアへと凝結するのを見とどけたのち、絶筆となった「ある夏の日の息吹」の章の末尾で「アクティヴィストであり、かつニヒリスト」という兄妹の自己確認を、可能性感覚の甦りを告げる言葉として——あたかも遺言のように——書きのこすことができた。さらには、これも遺言のようにして、「別の状態」のユートピアに代わるあらたなユートピア構想を作品のための覚書として残すことができた。「帰納的志向のユートピア」という名のそのユートピアはまた、「別の生のユートピア」(Utopie des andern Lebens)とも呼ばれている。そして、「別の生のユートピア」に到達するためには、「いかなる固定した結果へも至らぬ、湧きいずるもの、咲きいずるものとして」「精神をあるがままに受け入れる」ことが必要だという。別の惑星に仮託して、人類とはちがう「別の生」のあり方を追求しようとした『惑星エト』こそは、仮に『特性のない男』が作品として破綻したとしても、それに代わって、『特性のない男』とはまた別の枠組みのなかで、あらたなユートピアの舞台を提供する作品になりえたのではないか——わたしとしてはそのような思いにとらわれもするのだが、残念ながらこの惑星ユートピア小説は、ついに作品として成立することはなかった。一九三〇年に一度、『特性のない男』が完成したら着手するとフランツ・プライに予告し、一九三七年にも、いつまでも終わらない『特性のない男』の完成を待たずして、いまずぐにでも書きはじめることができるとみずから覚書にしるしたにもかかわらず、『惑星エト』

は、けっきょく幻の小説のままに終わったのである。

しかし、メルシエの二十五世紀人が言っていたように、精神のリレーにも似た連鎖というものはあるのではなからうか。ひとりの人間がなしとげられなかつた仕事を次の世代のだれかが受け継いでいくという、目に見えない鎖でつながった精神のリレーが。そのような継承の黙約を交わしたかのように、ムージルの幻の小説構想を引き継いでいく人物がいるとすれば、それは、ムージルよりも四半世紀遅れて同じオーストリア文化圏に生を受け、長じてはムージルを崇拜することのみずからも作家となり、ついには二十世紀ドイツ語文学を代表する作家としてそのムージルと並び称される存在にまでなつた、あのエリーアス・カネッティ（二九〇五—一九九四）ではないかと思われる。

05 — 異世界、あるいは越境する精神 — カネッティ『人間の地方』

その長い生涯のなかで、カネッティは数多くの感謝の言葉を残した。わけても有名なのは、一九八一年のノーベル文学賞受賞にさいして、ドイツ語文学の四人の先達にささげられた謝辞である。そこで名指しされたのは、カール・クラウス（一八七四—一九三六）、フランツ・カフカ（一八八三—一九二四）、ローベルト・ムージル（一八八〇—一九四三）、ヘルマン・ブロッホ（一八八六—一九五二）であるが、この四人の名前を連ねられて、だがしかし軽い違和感、あるいは落ちつき悪さのようなものを感じないだろうか。いずれ劣らぬ世紀転換期オーストリア文学のスターたちではある。だがそれぞれの作家としての資質はあまりにも異なつてはいないか、謝辞をささげる対象としてこの四人を結びあわせるカネッティの視座は

いったいどこに置かれているのだろうか、と。

いや、この四人がなんらかの共通項で結びあわされているのではないのかもしれない。受賞講演「謝辞」によれば、カール・クラウスは「聴くことを教えてくれた」人であり、「戦争の予防接種をしてくれた」人であった。カフカには「とるにたらぬものに変身し、権力の手から逃れること」を教えられた。ムージルからは「ひとつの作品に、それを完成させられるかどうかかわからないまま何十年も取りくむことができること」を学んだ。プロツホを知って「以来、呼吸というものについて深く思いをめぐらすようになった」……。このように、作家カネッティを形づくるさまざまな特性が個別に呼びだされ、それぞれの特性を分与してくれた恩人との結びつきが、たんにひとりずつ列挙されているだけなのかもしれない。そう考えたうえでもう一度この「謝辞」を読むと、ムージルとの関係だけが、他の三人と比べていくらか異質であるように思われる。なぜなら、他の三人への感謝の言葉には、「聴くこと」「戦争」／「変身」「権力」／「呼吸」という、カネッティ文学の内実を指ししめすキーワードが織りこまれていたにたいし、ムージルの場合には、その忍耐づよい仕事ぶりが、とりたてて称揚の対象となっているからである。

カネッティの生と作品全体に視野をひろげてみると、ムージルとの関係の特異性が、よりはつきりと見えてくる。カール・クラウスは若きカネッティの神であった。クラウスとの出会いがもたらした衝撃とその後何年にもおよぶクラウス崇拜は、自伝第二巻『耳のなかの炬火』（一九八〇）に詳しい。くわえて、クラウスを語ったエッセイ「カール・クラウス、抵抗の学校」と講演「新しいカール・クラウス」もある。名もない詩人であった自分をはじめて公の場に引きだしてくれたプロツホに、カネッティは終生恩義を感じていた。一九三六年には、プロツホの生誕五十年記念講演で彼にオマージュを捧げている。尊敬するカフカのためには、『もうひとつの審判』（一九六九）という長いエッセイを書いた。しかしムージルにたいしては、カネッ

ティは一篇のエッセイも書かなかつたし、ひとつの記念講演もしなかつた。

しかし、だからといって、他の三人とくらべてムージルが一段低いあつかいを受けているわけではない。自伝第三卷『眼の戯れ』(二九八五)を読めば、ある意味では他のだれよりも賛嘆の対象になっていることがわかるだろう。なぜならそこでムージルは、あの「ゾンネ博士」と重ねあわされているのである。カール・クラウスとそっくりの顔をした、しかしその話しぶりや博識から穏やかな賢者をおもわせるゾンネ博士は、多くの人を崇拜したカネッティにあつても特別の存在であつた。自伝第一卷『救われた舌』(一九七七)における母、第二卷『耳のなかの炬火』におけるカール・クラウスとならんで、絶対的な崇拜の対象となつている人物である。母とクラウスにたいしては、のちにアンビヴァレントな感情をいだくにいたつたことを思えば、唯一、生涯にわたつて崇拜の対象になつた人物と言えるかもしれない。そのゾンネ博士を讃えるとき、くりかえし引きあいに出されるのがムージルなのである。

ゾンネ博士は語つた、ムージルが書いたように。「……」彼の言葉は、語つているうちに生まれ出てきた。しかしながらその言葉は、書くことによつてムージルがようやく到達したあの完全な透明さのなから、生まれ出てきたのだった。くる日もくる日も、わたしがまさに特権をあたえられた者として聴くことができたもの、それはもうひとつの『特性のない男』の諸章であつた。^[29]

ゾンネの語り口のきつぱりとした明晰さには、ムージルの文章を思わせるものがあつた。^[30]

ゾンネ博士とムージルは、こうして透明・明晰という、カネッティにとつて最大限プラスの符号によつて

結びあわされる。だが、たとえばカネッティが『特性のない男』について、「文学のどこを探しても、これに比肩しうる作品はないように思われる」^[11]とまで言うとき、それはただムージルの明晰さだけを讃えた言葉なのだろうか。ムージルは、その忍耐づよい仕事ぶりと思考の明晰さのゆえにのみ、これほどまでの称賛をカネッティからちえたのだろうか。

カネッティに『人間の地方』(一九七三)という一書がある。副題には「手記一九四二—一九七二」とあり、手にとると、なかにはアフォリズム形式の断章が年代順にならんでいる。これはしかし、手記ともアフォリズムともただちには言いきれない不思議な作品である。というのも、伝統的アフォリズムの形式におさまる、箴言と呼ばれもしよう一般的省察のあわいから、過剰なまでに幻想的な空間を現出させる断章がくりかえし不意に立ちあらわれてくるのである。そもそも巻頭におかれた断章からして、奇妙なものだ。そこには、一定の年齢に達すると人間の身体が年ごとに小さくなっていく世界が呈示されている。

そうすれば、六歳か八歳にしか見えないほんの小さな人たちが、もつとも知恵があり、もつとも経験をつんだ者と思われるようになるだろう。いちばん年老いた国王が、どこの国でもいちばん小さい人になるであろう。教皇といえば皆ほんの小さな人だけになってしまい、司教が枢機卿を、枢機卿は教皇を、それぞれ見おろすことになるだろう。^[12]

ここに見られるのは、高齢の権力者ほど身体が小さくなって社会的地位と空間的位置の上下関係に逆転現象がおこるといふ、一種の〈逆しま世界〉である。この逆転の構図を呈示して、そしてカネッティは言うのである。もしもそういうことが起こるなら、「それはすてきなことだろう」と。

別の現実ともいふべき異世界が、ここではまだ、観念が紡ぎだしたものである証しに接続法第二式で語られている。内容的にも権力への揶揄だと、素朴に解釈できなくもないだろう。けれども以後の断章では、いくつもの異世界が直説法で、しかもなんのコメントも差しはさまずに描出される。そして、解釈を拒むかのように、孤立したまま異形のすがたをさらしている。

巨大な女たちが、小人のような亭主をポケットにしるばせて歩きまわる国。争いが起こると、女たちはそれぞれの亭主をポケットからさつと引っぱり出し、それが小さな魔神でもあるかのように、たがいに突きつけあう。^[13]

このような異世界断章は、成立史的にこの書の第一期（一九四二―一九四八）にあたる部分ではまだそれほど目立たないが、第二期（一九四九―一九六〇）から増えはじめ、第三期（一九六一―一九七二）にはかなり集中して現われる。とりわけ第三期には、「そこでは……」（*Do...*）にはじまる断章が十連続して記された箇所や、「……という社会」（*Eine Gesellschaft, in der...*）ではじまる断章が十六連続する箇所、さらには「裏返し」（*Umkehrungen*）という見出し語のもとに六つの断章がまとめられている所があり、ことのほか目をひく。そのうちのいくつかを拾いだしてみよう。

そこでは、死者たちは雲のなかで生きつつけ、雨になって女たちを孕ませる。^[14]

そこでは、だれもが一匹の土着の虫に支配されており、その虫の世話をして従順に暮らしている。^[15]

人間が一生に一度きりしか泣かない社会。人びとは極力なみだを流さない。泣いてしまったら、なにひとつ楽しみがなくなり、よぼよぼの老人になってしまった。^{〔136〕}

人間が食べる代わりに笑う社会。^{〔137〕}

犬は主人の口輪を取ってやった。しかし引き綱はしっかりと握っていた。^{〔138〕}

さながら異世界の見本市のようなこうした断章群をまえにして、わたしたちは『人間の地方』を手記あるいはアフオリズムとなおも呼べるだろうか。ここに記されているのは、もはやカネッティの日々の思索の記録でもなければ、とぎすまされた観察の簡潔な表現でもない。それよりもむしろ、SF小説の断片に近いものと言えるだろう。SF的想像力のはばたきによって、カネッティはここで現実と非現実の境界を踏みこえて、さまざまな別の世界に侵入したかのようだ。これらの断章は、そうした別の世界の情景をひとつひとつ切りだしてきて、脈絡なく並べたもののように見える。その配列の無秩序さのゆえに、また情景の描写自体さして彫琢されぬまま無造作に投げだされているため、かなり見えにくくなっているが、『人間の地方』に見られる異世界断章は、そのおびただしい数からいっても、その背後にユートピア的と呼びうる強烈な意志の存在を感じさせずにはおかないのである。たんなる文学の戯れにおしとどめることのできない、現にあるものとは別様の存在可能性をもとめようとする強烈な意志の存在を。

そう言っただけでは独断と思われましょうこの印象は、おなじ書におさめられた歴史をめぐる省察を読む

ことによつて、ほとんど確信に変わる。一九五〇年のある「手記」で、カネッティはこう言っているのである。

歴史はあらゆることを、そうなる以外にはなかつたかのように語る。しかし本来、何百とおりものあり方がありえたであろう。歴史は現実を起こつたことの側に立つて、つよい連帯の力で現実に起こつたことを拾いあげ、現実には起こらなかったことから画然と区別するのである。あらゆる可能性のなかで、歴史はたつたひとつの可能性、生きのこつた可能性にすがりつく。だから歴史はいつも、まるで強者のために、つまり実際に起こつたことのためにあるかのごとく感じられるのだ。それは起こらないままではできないことであろう、それは起こらなければならなかつたのだ、と。〔139〕

わたしたちが歴史と呼んでいるものは、ふつう、「現実に起こつたこと」の集積である。太古に何ごとかが生起して、最初の現実を形成した。その上にいくつもの時間が降りつもり、しだいしだいに時代の層が堆積する。固い基盤のうえに積みあげられた、無限に上昇する塔としての歴史。ところがカネッティは、そのような垂直にイメージされた堅牢な歴史像は虚構だと言う。「現実に起こつたこと」の背後には、無数の「現実には起こらなかつたこと」が可能性としては含まれていたし、現実と呼ばれましょう「生きのこつた可能性」が唯一必然的な歴史の構成要素と決まっていたわけでもない。もしかするとそれは、生起しないまま他の多くの可能性とともに埋もれていたかもしれない。それに代わる別の可能性が現実となっていたかもしれない……。そのような考えは、垂直にそびえ立つ塔としての歴史をきしませる。

かつてひとつの現実が生起したとき、その背後には排除された何百もの可能性がうごめいていた。その可

能性のひとつひとつがもしも実際に生起して、それぞれの現実を作りだしていったとすれば、その時点で歴史は何百とおりかに分岐したであろう。しかも歴史は現実、つまり選択された可能性の連鎖だから、ひとつの現実が生起するそのたびごとに分岐していく歴史のすがたは、もはや塔のもつ単線的なイメージを維持できず、時とともに何千何万もの分枝を派生させる大木に似たものになるであろう。まるで一本の幹から巨大な樹冠を茂らせるにいたった樹のように、そのとき歴史はかすかな風にもどよめいて、おおきく揺らぎはじめるだろう。カネッティは言う。

わたしたちの歴史における発見の連鎖は、それ自体ひとつの悲劇である。いくつかがことがほんの少しちがつていただけで、すべてのものが別の様相を呈したのであるように。^[14]

カネッティの目に映る歴史の相貌は、こうしてまたしてもSF的世界に近づいていく。過去におけるほんのわずかの差異が未来を完全に変貌させるという話は、あらためていうまでもなく、タイム・トラヴェルもこの呼ばれるSFジャンルにくりかえし登場するモチーフである。たとえばレイ・ブラッドベリの小説『雷のとどろくような音』（一九五二）では、大統領選挙で平和主義者キースが当選した翌日、タイムマシンで過去の動物狩りに出かけたエッケルズが紀元前六千万年の蝶を一匹ふみつぶしてしまったばかりに、二〇五五年の現在に帰還したときには、新大統領は対立候補だった危険な軍国主義者ドイチチャーに変わっていた。一九四五年にしろされた右の「手記」でカネッティは、このエッケルズの嘆きを先取りするかのように、悲嘆とともに歴史の現在を見つめている。

「いかにしてへものごとが違ったものになりうるか」を示すのがSFジャンルの特性」だと、D・スー

ヴィンは言った^[141]。異世界断章といい、歴史の相貌といい、SF的世界に近似していくカネッティの思考の根底に認められるのも、スーヴィンのいう「SFジャンルの特性」をささえているのと原理的にはおなじもの、すなわち、現にあるものとは別様の存在可能性をもとめようとする強烈な意志であろう。この意志をもつまなざしが現実を見るとき、目のまえの現実もまた、歴史と同様、強固な唯一性の表皮をはがされ、ゆらぎはじめる。夢想的と言われもしようこのまなざしは、だが現実を直視すると称して権力の側につき思想家たちよりもよほどしっかりと現実を見すえていた、とカネッティは言う。

現実を貶めるのでも美化するのでもなく、このおなじ現実のなかに、状況が変われば出現することも可能となるう、もうひとつの現実の萌芽を見てとるのは、もつと勇敢なことだろう。^[142]

かつてカネッティ以前にも、これとおなじ「勇敢な」まなざしを現実にふりむける作家がいた。『特性のない男』という奇妙な表題の小説のなかで、彼はこう言っている。「ユートピアとは可能性とほぼ同じものだ。可能性は現実ではないということは、いま編みこまれている状況に妨げられて、可能性が現実になれないでいるというだけの話だ」。その作家、ムージルは、このようなもの見方を〈可能性感覚〉と呼んだ。この能力のゆえにムージルは、長大な小説空間でウルリヒという名の「特性のない男」に化身して、現実の背後にひそむ不可視の可能性を見つづけることができた。歴史の現在に、これとは別様でありえた無数の見えない歴史の姿を想い、現実のただなかに、これとは別の現実の萌芽を読みとろうとするカネッティもまた、このおなじ能力の継承者だと言えるだろう。

非在の可能性を幻視する可能性感覚のまなざしを浴びて、『人間の地方』は、通常のアフォーリズムのジャ

ンルを越えた途方もない作品となる。カネッティの場合、そして、そのようなことが起こるのは『人間の地方』に限ったことではない。『マラケシュの声』（一九六七）は、「ある旅のあとの手記」という副題をもつからといって、ただちに紀行文と言いきれるだろうか。『群衆と権力』（一九六〇）は、これを社会学の書と言うべきだろうか、それともこれは心理学の、人類学の、哲学的エッセイの書か。伝統的ロマンの形式におさまっているかに見える『眩暈』（一九三五）にしても、その奇怪な想像力の噴出はどこかへけたはずれ」という印象をあたえるし、演劇的資質を自負していた彼の三つの戯曲は、そのうちのふたつまでがSF仕立てのけつして正統的とはいえない手法で書かれている。それにあの三巻からなる自伝。作家の書いた自伝が、ときとして純粋な虚構作品以上にその文学的価値を評価されるなどということが、かつてあっただろうか。さらには、こう列挙してきてあらためて思うのだが、これらの書物をひとりで書いたカネッティという作家は、ひとこと作家と呼んではすませられる存在だろうか。小説家であり、劇作家であり、エッセイストであり、自伝作家であり、「手記」作家であり、思想家であり、在野の学者だった彼は、若き日には『第三ブチルカルピノールの析出について』という論文で学位をえた化学者の卵でもあった。『惑星エト』構想をのぞけば、その生涯の仕事が結局は『特性のない男』というひとつの長大な小説に収斂していくムージルと異なり、カネッティというこの「特性のない男」は、たえず変身をくりかえし、まるでひとつところにとどまることを怖れるかのように、さまざまジャンルへと越境していったのである。

このように、既存の境界線をいとも容易に踏みこえる精神を〈越境する精神〉と呼ぼう。現にあるものとは別様の存在可能性をもとめて、カネッティは越境する。作品のなかでは、そのユートピア的まなざしによつて別の現実へと越境し、個々の作品においては、くりかえし固有の伝統的形式ないし固定化されたジャンルを越境し、その生涯においては、ひとりの物書きとしてさまざまなジャンルへと越境する。この〈越境

する精神」が、〈変身〉とも共振するカネツティの精神的支柱だとすれば、カネツティが文学の先達として他のだれよりもムーヅルを讃え、『特性のない男』を最高の文学作品と評したとしても、さして不思議ではないだろう。あの賛辞は、ムーヅルから可能性感覚を受け継ぎ、それを〈越境する精神〉へと発展させたカネツティの、みずからの精神の中枢形成にもっとも多くを負う者にむけられた感謝の言葉ではなかつたか。

カネツティの〈越境する精神〉にはしかし、ムーヅルの可能性感覚にはないものが付加されている。ムーヅルの可能性感覚が多分に観念的であり、せいぜい「感覚」のレヴェルでしか作動しないのたいし、カネツティの〈越境する精神〉は、「精神」とはいいながら、圧倒的な肉体性をともなっているのである。ふたたび『人間の地方』の異世界断章から引いてみよう。

かれらは頭を体のなかに引つこめることができた。そして、胸の小さな穴から外を覗いた。〔43〕

わたし死にたい、と彼女は言った。そして、十人の男を飲み下した。〔44〕

見かけは太った人間。でもそれは、声をそろえてピーピーしゃべっている十二人のやせた人間をひとまとめにして包んだもの。〔45〕

ここに挙げたのも、先に紹介したのとおなじ、カネツティの頭脳に映しだされた想像世界の断片である。これら現実には属さない、だからほんらい抽象的であるはずの世界が、どういうわけか不気味なまになまましい肉体性を帯びて、別のもの、異質なものをつきつけてくる。ごく短い断章でありながら、カネツ

ティの見る異世界は、まるでこうした異形の人間たちの住む世界がどこか遠くに実在するかのよう、質量のあるひとつの空間を形作っているのである。この独特の肉体性は、ムージルの異世界断章と比較すれば、より鮮明に感じとることが出来るだろう。

前節でくわしく述べたように、ムージルには、一般にはあまり知られていないSF小説の構想があった。

『南極の国』もしくは『惑星エト』と題されるはずであったその小説は、ついに作品として結実することはなかったけれども、彼の『日記』には、一九二一年から一九三七年の長きにわたつてすくなくならぬ草案および覚書が書きしるされている。残された断章から推測するかぎり、だがしかしムージルのSF小説には、一種の思考実験の色彩がつよい。「夫もしくは妻が、犬か馬とおなじ寿命になる。ふたりが心から結ばれているのは八年ないし十四年。愛はどういうものになるだろう」——ムージルのSF小説構想の基底には、いっかんしてこの「……だとしたらどうだろう」という問いが流れている。だから一見カネツティの異世界断章にちかい発想がしるされるときにも、どこか生氣に乏しく、頭で考えただけという印象をぬぐえない。「両足を再生するために、こうしてかつて脳だった部分が使われた女」にして、「勃起すると、身体全体が膨張する男たち」にして、そこにはカネツティの、グロテスクでありながらもどこかおかしみのある、生身の肉体性が欠けているように思える。むしろムージルの場合、おなじ異世界断章とはいっても作品として公表する以前の覚書でしかないから、その点は考慮しなければならぬが、それにしてもムージルの観念性とカネツティの肉体性とのあいだには、大きな隔たりがあると云わざるをえない。

この隔たりは、ふたりの作品全般からうける印象のちがいにもつながっていく。別様のものを思考するだけのムージルが、境界線の彼方を幻視しつつ——そこには兄妹愛に結ばれたウルリヒとアガートのすがたが浮かんでいられるかもしれない——ためらいとともにこちら側の世界にとどまりつつづけるのにたいし、カネツ

ティには、境界線を踏みこえてみずから別の存在になろうとする、いわば肉体のうごめきのようなものが感じられる。たとえば『眩暈』におけるキーン博士は、妻テレゼの虐待をうけて「石」に変身してしまうし、『猶予された者たち』（一九六四）では、自分の寿命をあらわす数字を名前とする人びとの——主人公の名は「五十」——一見して無機質あるいは抽象的な社会が、しだいに反ユートピアへと反転し、人びとの不安と絶望がまざまざとあぶりだされる。こうした〈越境する精神〉の肉体性をしめす最たるものが、カネッティの主張しつづけた、死の拒否であろう。

死という、人間にとつてあまりにも自然な生理現象にたいするカネッティの憎悪は、不可解であり、ときに異様ですらある。『人間の地方』で異世界断章とならんで奇異の念を起こさせるのも、この死についての断章だ。

わたしの人生のきわめて具体的かつ真剣このうえない目標、だれははかることのない目標は、人間のために不死を獲得することである。^[14]

荒唐無稽ともとれるこのような言葉は、だがけつして冗談で言われているのではない。一九三六年のブロッホ生誕記念講演で「死が存在するかぎり、美は美でなく、善は善ではありません」^[15]と語つて以来、カネッティはいつかんして死を拒みつづける。死を弾劾するカネッティの言葉は激しく、いつさいの宥和を受けつけないが、「人間のために不死を獲得する」というその強烈な意志は、はたして「頑迷固陋の……やくだいもない企て」^[16]であり、常軌を逸した詩人の妄想でしかないのだろうか。そうではあるまい。カネッティとて、物理的な意味での死の到来が不可避であることは承知している。そのことは十分に承知しつ

つ、しかしそれでもなおカネッティは、死の存在を許容することを断固として拒否するのである。一九七一年におこなわれたR・S・バウアのインタヴューに答えて、カネッティは次のように言う。

いつの日か事態は別様になるかもしれないであるとか、もしかしていつの日かそうした永遠の生が可能になるかもしれないだとか、ただそう思うだけで満足することなど、わたしにはできません。それよりもはるかに重要だと思われるのは、わたしたちが現に手にしているこの生をひきのばして、いつそう多くのもので満たすこと、そしてやはりどうしても葬りさることのできない死と、闘いつづけることです。道徳的に認めないことによってであれ、肉体の延命を可能にする生物学的手段によってであれ。人生をより完全で、より豊かで、より責任あるものにするのが、わたしたちの目的とならねばなりません。〔49〕

この発言からわかるのは、いつけん「空想的」で「ほとんど常に奇怪な」〔50〕ものに思われもする、死をめぐるカネッティの言葉が、どうやら生のモラルともいうべき位相で発されているらしい、ということである。たとえ物理的に不可避ではあっても、死はカネッティにとって「道徳的に」(moralisch) けつして認められるものではない。なぜなら、死は、「人生をより完全で、より豊かで、より責任あるものにする」という人間の生の「目的」を妨げるからである。道徳的に善として認知されたその目的を達成するためには、だから、われわれは「肉体の延命を可能にする生物学的手段」を使ってでもこの生を可能ながきりひきのばし、そうすることによって生を「いつそう多くのもので満た」さなくてはならない……。

生の豊饒さ、生の全体性をもとめるこのようなカネッティの考えは、「正しい生」の探求へとウルリヒを

向かわせたムージルの思考をふたたび思いおこさせる。ムージルにとっても「モラル」とは、「さまざまな可能性の無限の全体を生きること」であった。そして、そこに現われてた無数の可能性をくまなく検証することによって「そうした無数の可能性を統合するただひとつの可能性」を見いだすことができたなら、そのときウルリヒは〈全体の秩序〉を手に入れることができるだろうと言われていた。だが、すぐにわかることだが、そのためには膨大な時間が必要だろう。「さまざまな可能性の無限の全体」を見たし、さらにそのなかから「そうした無数の可能性を統合するただひとつの可能性」を見いだすにいたるには、仮にそれが可能だとしても、形式論理的にいつて無限の時間が必要となる。じじつ、『特性のない男』におけるユートピア探求は、そのような「ただひとつの可能性」として想定された「千年王国」が破綻し、それに代わるあらたなユートピアが求められた時点で、作者の死によって中断されてしまった。それを知ったカネッティは思ったのではないだろうか。「さまざまな可能性の無限の全体を生きる」ためには、無限の時間が、すなわち不死が必要である、と。『人間の地方』において、カネッティは言う。

すくなくとも、人間の生みだしたあらゆる習俗と出来事を知りつくすまでは生きていくことだ。さらなる生が拒まれていくからには、過去の生をまるごと取りもどすこと。自分の存在が解消するまえに、自己を統合すること「……」。〔5〕

わたしの生はそのすべてが、分業を廃止し、なにもかも自分の頭で考えるという絶望的な試みである。というのも、それがひとつの頭脳に集められ、そうすることによってふたたび一者になるためにである。すべてを知りたいというのではない。そうではなく、ばらばらになったものを一つにまとめた

のだ。そのような企てが成功しようもないことは、ほぼ確実だろう。だが、成功するかもしれないという見込みがごくわずかでもあるなら、それだけで十分、全力を傾注してやってみるに値する。^{〔52〕}

人間のために不死を獲得する、それが不可能なら、生を可能なぎりひきのばそうとするカネッティの企てが、人類が過去においてなしえたすべてのことを知りたいという、凶暴なまでに貪欲な願望にもとづいていることが、右の断章からもわかるだろう。あらゆる領域で「分業」化のすすむ現代社会——ムージルの言う「蜜蜂国家」——においてそれがいかに夢想的な願望であるか言をまたないが、この無謀ともいえる願望をささえているのは、たんなる知的欲求にとどまらない、「ばらばらになったものを一つにまとめたい」という「統合」への意志なのである。その統合への意志は、ムージルが〈全体の秩序〉と呼んだ「無数の可能性を統合するただひとつの可能性」への希求と重なりあうものであるが、カネッティの場合、それは抽象的なユートピア願望に向かうのではなく、具体的に肉体性をともなった不死への願望として現象する。『人間の地方』においても、だからカネッティは、不死の問題をスローガンの言葉で語るだけでなく、不死の世界を具体的にえがこうとささえる。

人間が意のままに年寄りにも若者にもなることができ、またたえず年寄りになったり若者になったりしている社会。^{〔53〕}

通過者と〈永遠の人〉。ある奇妙な世界の情景が、頭にこびりついて離れない。その世界では、人間は、ある決まった年齢でびたりと成長をやめ、以後年をとらないのだ。だれもが、それぞれに決めら

れた年齢で。ある人はかなり急いで三十歳になり、以後年をとらない。ある人はよろよろしながら七十歳になり、以後七十歳のままだ。十二歳の子どものまま、それ以上大きくならない人もいる。つまり、そこには二種類の階層の人間がいて、一方はまだ到達年齢への途上にあり、他方はすでに到達している。子どもたちの多くは、その十二歳という年齢を駆けぬけていくが、しかしその一方で、いわば永遠の十二歳の子どもたちもいるのである。〔54〕

不死のテーマはここで、究極のSFとして異世界断章と重なりあう。不死はカネッティにとってユートピア的な別様の存在可能性として、真剣な思念の対象となるのである。思考実験をこえた具体的な願望として不死のテーマを扱うことなど、賢明なムージルにはおそらく思いもよらぬことであつたにちがいない。可能性感覚に導かれながらも、こうしてカネッティはムージルとはちがう独自の道に進んでいく。このちがいは、どこからくるのだろうか。

『人間の地方』の一断章でカネッティは、歴史について次のように語っていた。歴史は「現実を起こつたこと」の側に立つ、と。だから歴史は「強者」のためにあるかのように感じられるのだ、と。ここで言われる「強者」を「中心に位置する者」と言い換えれば、その反対概念としての「弱者」とは「周辺に位置する者」だと言えるだろう。であれば、現実には起こらなかつたことに思いをはせる可能性感覚は、がんらい「弱者」としての周辺人の思考ないし感覚であるにちがいない。そしてたしかにムージルは、またカネッティも、ドイツ語文化圏あるいはハープスブルク帝国文化圏の「中心に位置する者」ではなかつた。

ムージルが生まれたのはオーストリアのクラウゲンフルト、古くからのケルンテン州の州都である。州都とはいえ、現在はスロヴェニアとの国境に近い、ヴィーンから遠く離れた町であつた。だがこの町に生まれ

たことは、ムージルの場合、あまり重要視するにはおよばない。なぜなら彼は、一歳の誕生日を迎える前にこの町を去り、以後父親の転任にともない、ボヘミアのコモタウ、上部オーストリアのシュタイア、次いでモラヴィアのブリュン（ブルノ）と、ハープスブルク帝国内の諸都市を転々とするからである。その後も学校・大学の入転学にともなう移動をくりかえし、比較的長くヴィーンに住むことになるのは一九一〇年の暮れ以降のこと、彼はもう三十歳になっていた。すでにあきらかだろう。ホーフマンスタールやシュニッツラーなど、ヴィーンに生まれ育った「若いヴィーン」派の詩人たちと比べるなら、ムージルは、ヴィーンを中心とする華やかな文化の周辺に佇む人であった。だがカネッティは、それよりもはるか彼方の辺境に立つ人であった。

カネッティが生まれたのはブルガリアのルスチュク（ルセ）、ドーナウ川が凍れば櫓でルーマニアに行けたという国境の町である。この町がカネッティの精神形成に果たした重みはしかし、ムージルにとつてのクラゲンフルトとは比べものにならない。カネッティは六歳近くまでこの町で暮らし、どうやらそこで自分の精神の祖型を獲得しようなのだ。『救われた舌』でカネッティは言う。「わたしがのちに体験したことはすべて、ルスチュクですでに一度起こったことだった」^[註]。つまり、それほどまでにルスチュクは、多様に富んだ町だった。ブルガリアの小都市とはいえ、ドーナウ川を介してヴィーンとも結ばれた古い港町だったため、さまざまな人びとが集まってくる多民族都市であり、七、八か国語を日常的に耳にすることができる多言語都市であった。〈スペインを追われたユダヤ人〉の末裔であるカネッティは、民族の言葉である十五世紀のスペイン語を母語として育ったが、両親が自分たちふたりだけのときに使う言葉であるドイツ語に憧れ、女中奉公にきていたブルガリアの少女たちにはブルガリア語で狼男や吸血鬼の話してもらっていた。不思議なことにカネッティは、その話をドイツ語で覚えているという。カネッティのなかで、いつと

もしれず言語間の越境が起こったのである。

カネッティの家には、その他にもルーミアニア人の乳母や、アルメニア人の下男がいた。母の親友はロシア人であり、父方の祖母はトルコの雰囲気の色濃くただよわせた人であった。毎週金曜日にはジプシーがやってくるし、近くには、通りすがりのブルガリア人の男を窓から眺めていたというだけの理由で夫に殺されたトルコ人の女の家があった。このような猥雑ともいえる生のエネルギーをかかえた多様性の町ルスチュクを、D・バルノウは「カオス的世界」と呼び、次のように言う。「別のものが別様であることにたいするカネッティの、するどいと同時に泰然とした、また多くの点で肉体的な受容力は、こうした幼少期の体験によって強められたにちがいない」¹⁵⁶。この「肉体的な受容力」(somatische Empfanglichkeit)こそは、カネッティにあつて、ムージルにはなかつたものであろう。カネッティの〈越境する精神〉に見られる圧倒的な肉体的性もまた、ルスチュクで身につけた、別様のものにたいするこの「肉体的な受容力」によつてもたらされたのではなかつたか。

そのルスチュクを一九一一年に去つたカネッティは、両親に連れられてマンチェスターへと渡る。それは以後、ローザンヌ、ヴィーン、チューリヒ、フランクフルト、ヴィーン、ベルリン、ヴィーン、パリ、ロンドンへと、いくつもの国境を越えていく旅のはじまりであつた。一九三九年に亡命先のロンドンに居を定めたあとも、彼は書くことによつてたえず別様の存在可能性をもとめつづけた。中欧のはるか辺境の町で幼年期に獲得した別のものにたいする鋭敏な感覚に、おそらくはムージルの可能性感覚を接ぎ木して。

二十世紀に出現する反ユートピアから語りはじめた本章は、ザミヤーチンとムージルを経由して、いつのまにかムージル以後のカネッティにまでたどり着いてしまった。ムージル以後の世界については第七章第四節以降でふたたび触れることにして、次章では、時計の針をいったん巻きもどし、世紀転換期のオーストリ

アという精神空間に生きるムージルに照明をあててみよう。カネッティを論じた本節でもふれたように、ムージルとカネッティは旧ハーブスブルク帝国の文化によって結びあわされている。旧ハーブスブルク帝国の文化を媒介にカネッティをもうひとりの「可能性人間」としてとらえるその視点を、時間のながれを逆転させて世紀転換期の若いムージルにふりむけると、そこにはまだ『特性のない男』の作家になってはいないが、いままさに「可能性人間」になろうとしているムージルの姿を見ることができよう。ムージルの可能性感覚はオーストリアの知的風土なくしては生みだされなかつたことがそのときわかるのだが、可能性感覚の誕生を告げるその現場には、とりわけ重要なひとりの物理学者が居合わせていた。